明治二十六年十一月十日發行

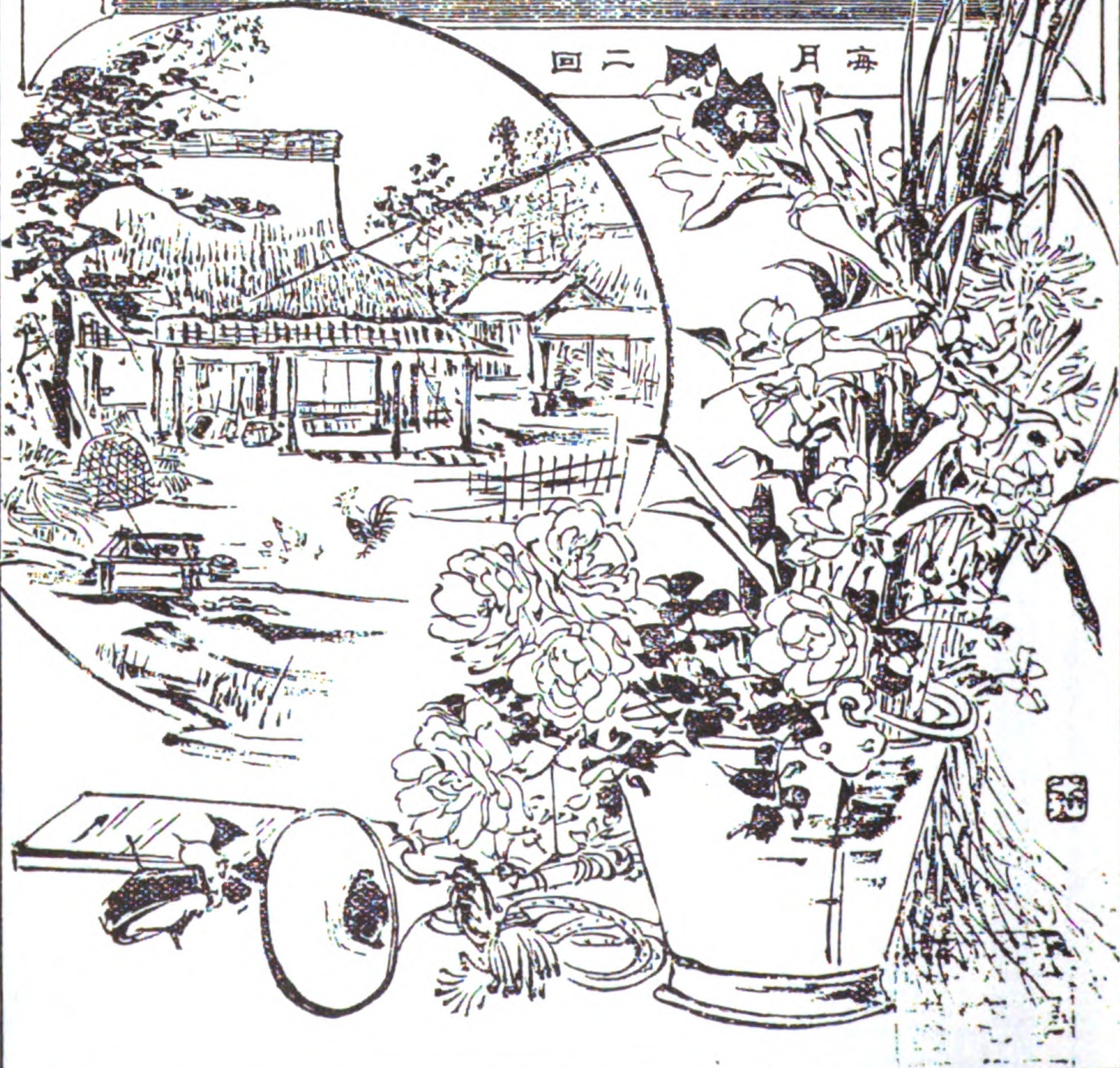
THE HOME MAGAZINE

家庭雜誌

東京家庭雜誌社發兌

定價金五錢

每月二回



第拾七號

短篇小說

明治文庫

最も詩趣多きものは短篇なり、最も雅致を含むものも短篇なり、最も奇絶なるものも短篇なり、最も壯快なるものも短篇なり、雜感を捨て抽象的に絶美を發揮するものも短篇なり。恰も霞中の花の如し、水底の月の如し、滊車を驅りて富岳の下を過ぐるが如し、滊船を走らして松島の灣を行くが如し。杜鵑の如し、電光の如し、蕣花の如し、一瞬の間に天地の大觀を示す、奇絶壯快之に出づるものあらんや。明治文庫第參篇には、短篇に得意なる江見水蔭氏の傑作十有四種を集めて、千紫萬紅、一度之を繙かば片舟に掉して急流を下るが如し、奇景百出、人をして應接に閑なからしむべき哉。

毎月壹回發行

正價

毎編讀切木版密畫入
洋裝頗美本印刷鮮明
一冊拾五錢
六冊金八拾五錢
十二冊金壹圓六拾錢●郵稅一冊六錢

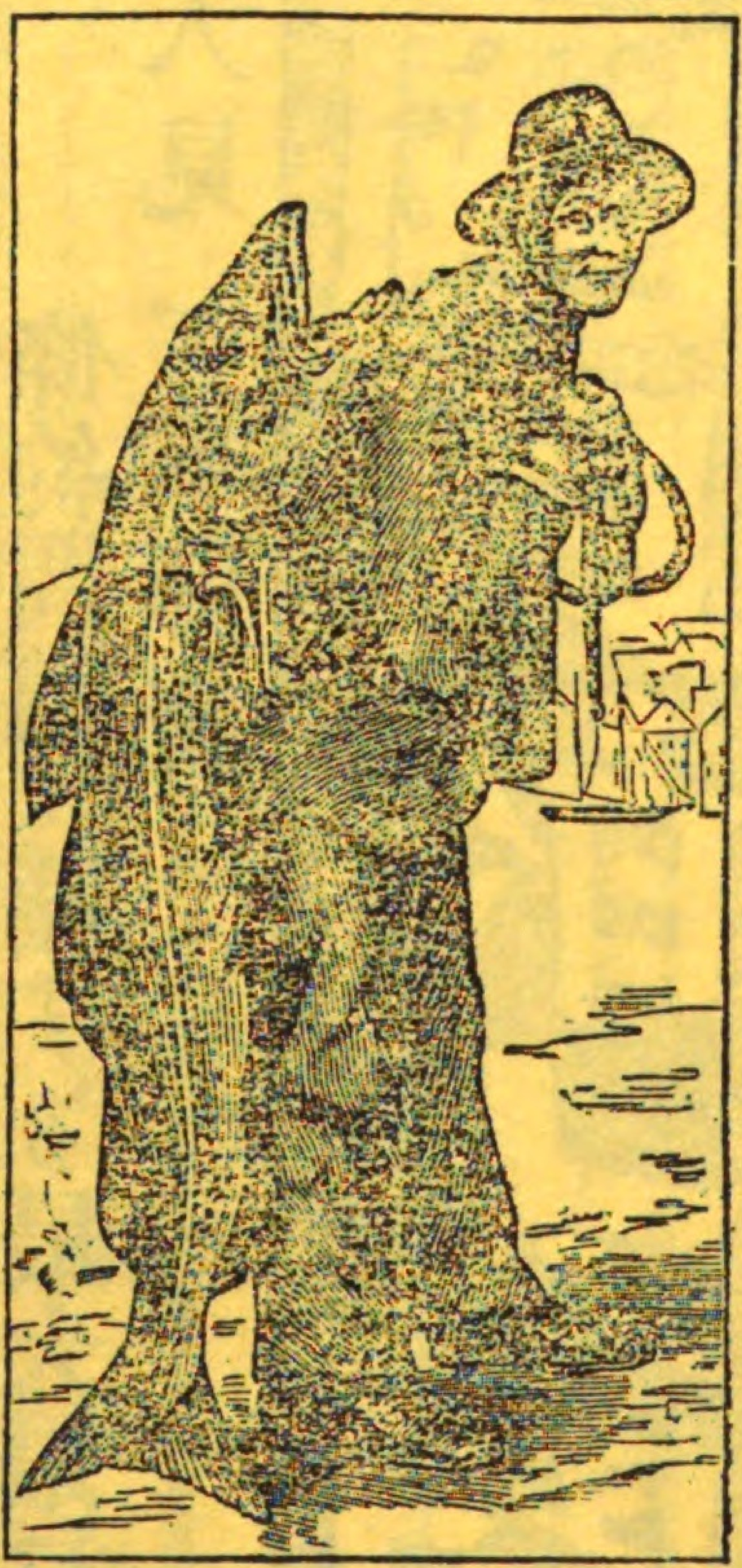
第三編

十一月十五日發兌

江見水蔭著

劍客 双龍急雨の中に長劔を鬪し
初嵐 初陣の少年暗夜敵將を切る
痼癖太守 木上の諫言樹下の憤怒
骨武者 人乎鬼乎瘠々如鐵
畫師 忽にして漁夫忽にして美女忽にして老翁忽にして少童
斷絃 月明の絶叫懸
信天翁 河の吐血
日本刀化して馬鹿鳥と成る
若楓 無情の水有情の人
故家水 出雲松江の金明水
漁郎 夏の磯冬の沖
わかれ霜 一字一涙墓前の感
畫師の妻 妻は女神娘は天使
一夜の宿 極端の理想極端の寫眞
雲烟過眼 短篇中の短篇十餘種を集む花紅柳緑

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館



條約問題に關する最大最良最新の著作

人見一太郎著

國民的大問題

頁數二百五十
定價二十錢
郵稅四錢

●雜居派は讀て以て新事實、好材料を獲るのみならす、又た大なる力を獲へし

●非雜居派は讀て以て敵情を知り、我備の薄弱を知るのみならす、又た釋然大悟する所あるへし

●中立者に取りては、暗夜の燈光なり、砂漠の羅針盤なり

●自由新聞は評して曰く『讀去て感慨止む能はさらしむ』亞細亞曰く『條約改正史に至りては引用豐かに秩序亦整ふ』朝野新聞は曰く『議論奇拔なるものなきにあらす』、非條約派たる中央曰く『快筆能く反對者をして倦まさらしむ』

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

THE TWELVE MEN OF LETTERS

毎月發兌

十二文豪

宮崎八百吉著

十二文豪第四卷 **チルヅチルス**

肖像入
定價十八錢
郵稅四錢

本書の價値を知らんと欲せは、左の批評を讀め、就中湖畔詩人及ひ其閑居、家庭の如きは作者が最も精緻的なる筆法を以て精彩に敘述したれは讀者をして讀去るの中洸々然として彼のチルヅチルスと共に相提携し湖畔のほとり山影水聲に起臥して樵唱牧歌を聞き樹蔭石邊に優游して歸雲飛鳥を眺め心靜に味究に自然造化の靈妙に化せられんとするの感あらしむ、(國民新聞)

一卷中讀て尤面白かりしは湖畔詩人及ひ其詩とチルヅチルス及ひ陶淵明の二章なり殊に後章の如きは支那に於ける田園詩人とチ氏とを對照批評せしものにして流俗の評論外一歩を拔て兩者大に其類を同ふすと雖其依りて來る性情、生活、天職に於て全然反對に立てるを論するの一段讀し得何か自然界、現實界の消息を知了するものに非されは斯る精細なる議論あるへからす蓋し湖處子にして始めて是論ありと言ふへし、(毎日新聞)

「チルヅチルス極めて面白し全一篇盡く無韻の詩なり」(護教)

一字一句詩趣を帶ふ、同情あり造詣深きに非ずんば焉ぞ能く斯の如くならん哉(福音新報)

平田久著

十二文豪第一卷 **カーライル**

肖像入
定價十八錢
郵稅四錢

竹越與三郎著

十二文豪第二卷 **マコウレー**

肖像入
定價十八錢
郵稅四錢

山路彌吉著

十二文豪第三卷 **荻生徂徠**

肖像入
定價十八錢
郵稅四錢

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

乾坤一布衣著

最暗黒之東京

定價十三錢
郵稅四錢

十一月九日ヨリ發賣

國民新聞紙上既に世の喝采を博したるもの。今や其の粋を抜き、且つ新たに材料を得て増加するもの殆んど三分の二。以て斯の冊子と爲す、世人若し○暗黒の東京とは如何なる所なるか？○木賃宿の混雜は如何なる狀態なるか？○殘飯屋とは何を賣る所なるか？○貧民倶樂部は誰に由りて組織されしか？○飢は汝等に如何なる事を敎ゆるか？○飢寒窟の經濟は如何？○汝は何故に貧となりしか？○貧天地の融通は如何？○汝は貧街の質屋を知るか？○小兒と猫は如何なる時に財產となるか？○新開町は何の方角に在るか？○銀貨は何故に翅を生ずるか？○座食とは何を意味するものなるか？○黄金と紙屑と孰れか價貴きか？○老耄車夫は如何？○生活の戰爭は如何？○下層の噴火線とは何ぞ？○車夫の食物は何ぞ？○下等飲食店第一の顧客は誰か？○飲食店の下婢は如何？○下等勞働者考課狀は如何？○日雇勞役者の人數幾何？蓄妻者及獨身者の狀態は如何？○夜店の景況は如何其他羅市は如何、朝市は如何、文久錢市場は如何、渾て是等の疑問を解釋せんと欲せば、來つて最暗黒の東京に學べ。彼は貧天地の豫審判事なり、彼は飢寒窟の代言人なり、彼は細民を見るの顯微鏡にして、亦彼は最下層を覗くの望遠鏡なり。

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

社告

◎家庭雜誌 五號六號十三號 品切れ

家庭雜誌第一號より御注文の御方有之候得共右三號は品切れに付豫め御斷り申上置候

家庭雜誌

發行日改正 毎月一回十日廿五日發兌

定價		地方郵稅共
一冊	金五錢	金五錢五厘
半年(十二冊)	前金五十錢	金五十六錢
一年(廿四冊)	同金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行(廿四字詰一回ニ付)金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

發行兼印刷人 垣田純明

編輯人 塚越芳太郎

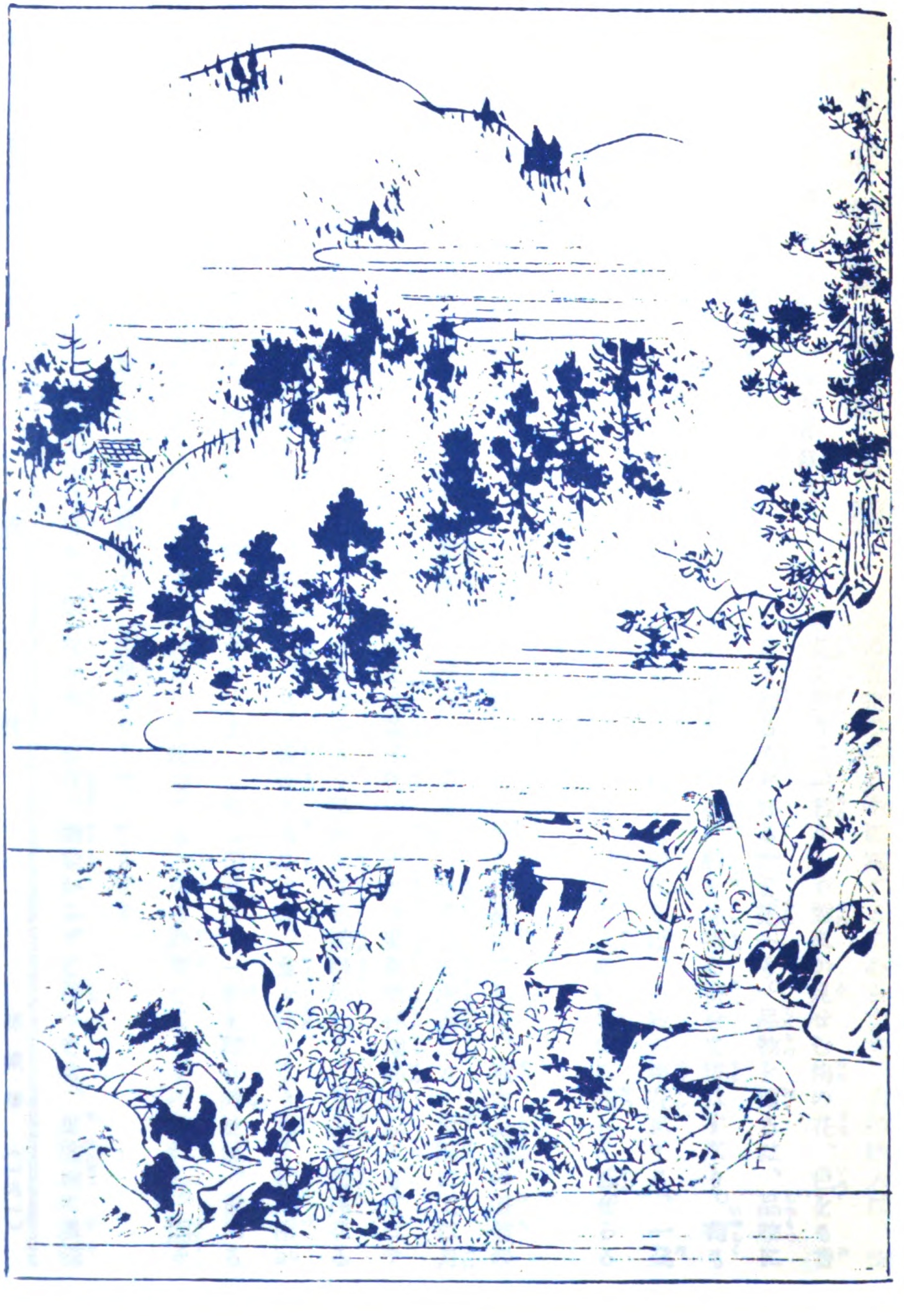
東京市京橋區日吉町四番地

發行所 家庭雜誌社

明治二十六年十一月十日發行

家庭雑誌第拾七號

目録



家庭雜誌第拾七號

（明治二十六年十一月十日發兌）

社説



品物の贈答

何故に品物を他人に贈る乎。他人に依賴するヿあり、豫じめ報酬として。他人に厄介になりたるヿあり、其の感謝として。

今吾人が斯に語らんとするは、報酬にもあらず、感謝にもあらず。唯た温かなる親切と、清らかなる誠心とを現はす爲めに、或る品物を人に贈るヿに就てなり。『文もなく口上もなく粽五把』何等のやさしき風情ぞ。一點の世辭愛相もなくして、限りなき眞情は寄せて這の五把の粽の中に寓するにあらずや。古の歌人は、梅の花を折りて、『君ならで誰にか見せむ梅の花、色をも香をも知る人ぞ知る』と謠へり。品物を贈るは、品物にあらずして、心の誠を品物に寄せて現はすなり。苟も心の誠を現はすものならば、一枝の梅花にても、一朶の薔薇花にても、受くる人には如何に樂しく感ぜらる可きぞ。

されはその心の誠をば餘所にして、唯た品物の價値のみ競はんとするは、大なる心得違なり。世間にては舟の如き菓子折、山の如き葡萄酒杯贈品としてもてはやすものあり。是れ大なる僻事にして、贈品の贅澤なる程、其の親切と眞心とは、愈々遠くなり行くに氣附かずや。まして斯る贈品は、一歩を踏み外せば、世にも恐ろしき賄賂てふ大なる罪惡となるものぞかし。能々勘辨ありたきヿならずや。

又た内心は甚だ面白からずと思へとも、世間前の義理

づくにて、彼方より斯る品を贈りたれば、此方よりも相當の返禮せねはならぬとて、餘儀なき義理合に迫られ、心ならずも品物の贈答をなすものあり。是れ親切の贈答にあらずして、僞善を以て僞善に報ゆるものと云ふ可し。斯る場合に於ては、獨り社交の紐を密にし、その人情を暖たむる能はざるのみならず、其の反對の結果あると疑ふ可らず。而して世間には、張り氣と唱へて、自から其の生活の度不相應なる贅澤の品物を人に贈り。甚しきはその家内には此れが爲めに大なる迷惑を感せしめても、是非人前を作り飾りて、一種の虚榮心を滿足せしめんとするものあり。此れ實に言語同斷の所行にして、吾人の甚だ賛成する能はざる處。



既に品物を他人に贈るは、主とする所品物その物にあらずして、温かなる親切と、清らかなる誠心とを現はすの標彰とせば。その如何なる物をば、如何にして贈るかと云ふとは、篤と分別せねばならぬとなり。諺に『團子投れば餅來る』とは、人間相互の眞情を穿ちたる言葉にして、一方の親切は、必らず他方の親切を喚起するを云ふ。品物贈答も、此に到れば眞に社交を惠むの福神と云はざる可らず。

扨如何なる場合に、如何なる品物を贈る可き乎と云ふとに就ては、序てながら一二の意見を陳べ置く可し。

○彼方の好尙を察す可き事。例せば茶人に麥酒を贈り、禁烟家に烟草を贈るが如きは、親切却て不親切

となる可し。

○『隣の苦菜』と云ふ諺あり、苦菜さへも、隣家の贈りものは、何となく甘き心地するとの儀なり。されば如何なるものにても、己れに有合の物を分ちて、その親しきものに贈るは、甚だ淡泊にして、甚だ面白し。

○旅行にてもなしたらんには、其の旅行先の土産は、甚だ妙なり。古人が嵐山の櫻花を書簡に封じて贈りたるが如きは、風流のみか、その情も最と濃かなるにあらずや。特に家族同行の旅行抔するものは、能々此邊に注意す可き也。

○又た他郷の人に物を贈るには、己が地方の土産を以てすると、甚だ好し。北海道の人より蒸菓子を貰ふよりも、せめて林檎なり、鮭なり、熊皮なり貰へば貰ふものも何となく難有く感す。その品物の如何によらず、何となく品物と土地と一致し、品物によりて、贈者の地方を代表したる心地すればなり。

○若し成る可きとならば、我が勞作によりて、出來たるものを贈らば、貰ふものは何となくその品物がその贈者を代表する如く考へ、轉た情味の厚きに感ず可し。同じ雉子なれども、鳥屋より買ひ來りたるを贈ると、自から山野を跋渉して、獵し得たるものを贈るとは、その貰ふ者の心には、別して大なる感覺の相違あるを忘る可らず。此事は特に一家の主婦たる可き人最も平生の心懸け緊要なり。例へばその病人を見舞にも、市より購ひ來れる鷄卵折を使に持せて贈るよりも、自から『肉汁』にても製して、携へ贈りたらんには、病人に於ては、如何ばかり親切に感ず可きよ。他人を感ぜしめんが爲めに贈るにはあらざれども、心の誠を表せん爲めならば、成る可くその誠の現はるゝ樣になすこそよけれ。

一双の靴下なり、手袋なり、若しくは小兒の頭巾な

り、自から手を勞し、心を勞して作りたるものを人に與ふる時には、その人は千金の物を貰ふよりも、深く心にその眞情を汲み取る可し。呉々にも主婦たる人は、此邊に注意ありたし。

獨り朋友、知己間のみならず、父子の間にも、夫婦の間にも、兄弟、姉妹の間にも、吉凶禍福は勿論の事、その誕生日、若しくは新年、歳暮、或はクリスマス抔の時には、互に贈答するは、自他の淸らかなる親切心を交換し、温かなる誠心を暖むる所以にして、世道人心に關する一大要件と云はざる可らず。特にその品物の如きは、寧ろ保存して、他日の紀念となる可きものならば、最も可なり。何となればその親切は何時迄も品物と共に存して、紀念する毎に、更らに新たなるを覺ふ可ければなり。書籍の如きは、此の中にて先つ恰當のもの歟。著作家抔は、自家の著書を人に與ふるもよろし。然る時には自から卷端にその由を記して與ふることそよけれ。詩、歌、發句作る人抔は、その自作のものを手向くるも、亦た品物贈答の本意に叶ふものならん歟。

実談

マダム、ド、スタアル　中

斯てチッカア孃はスタアル男爵夫人となりぬ。

結婚は不幸なりき。スタアル男爵固より庸人にあらざりしと雖ども、華々しき其妻の傍に立ちては、宛ながら月夜の星の如く、光りは爲めに掩はれぬ。而して英發の才華と熱切の感情とを是れ重ずる女史は、久しからずして其良人のあまり感情に乏しくあまり聰明英發の姿に乏しきを稱して次第に之を疎じ去り、千八百九十八年女史が佛國政治に手を出して政府の猜忌を惹起し三度までも其良人に累を及ぼさんとするに及むで、

夫妻終に別居することゝなりたり。此時スタアル男爵は莫大の負債を醸し居れり。是れ半はスタアル夫人の濫費豪華金銭を水の如く使ひ棄てたるの結果にして、其豪奢の甚しき、其初皇后アントアネットよりしば〳〵異見を加へられし程なりき。ナポレオン一世の猶未だ小將軍たりし頃、兄弟ジョセフに書き送れる書翰に云ふあり、

スタアル氏は非常に困窮し居らるゝに、其妻は宴會をなし舞踏會を開きなど致し候。貴君は度々彼婦人を御訪問に相成由然らば、月に千法か二千法も其人に與ふる樣彼婦人に御勸有之而可然事には候はずや。假りにスタアル夫人を男子と見做し、判斷し候はむにも、若し此男子がネッカアの財産をつぎながら、有名なる位置に立つゝあらゆる便宜を有しながら、己れは奢侈の生活をなしながら、其妻の困窮を顧みざる樣の事有之候はゞ、社會は果して斯る男子を容れ可申や否や。

ナポレオン一生スタアル夫人と合はず、後帝位に上るに及んで其の左千右渉の煩はしきに堪へず女史を佛國の外に追放したるは、固より大人氣なきの譏を免るゝ能はずと雖ども、此に擧げたる一書の如きは何人も其穩當の言たるを認む可きのみ。千八百〇二年スタアル男爵疾重きに到り、女史は流石に過去の所行に悔ゆる所あり、書を寄せて舊に復せむことを報し、遂に破鏡再び合して夫妻巴里に向ひしも、スタアル男爵は中途にして病革まりて逝きぬ。

スタアル夫人は尤も交際を好むの婦人、殊に男子との交際を好むの婦人なりき。女史の到る處、男子は常に其家に滿ちぬ。文學の大家、政界の名士、朋友、嘆美者、眷顧を願ふ者、皆鐵の磁石を趁ふて奔るが如く女史の身邊に群がり來れり。男子に對するの關係に於ては、女史は他の多くの有名なる佛國婦人の如く、往々

にして規外に逸し、其生涯を黙汚するものありき。女史は先づ第一に路易十五世の庶子なりと云ふナアルボーンに向つて其愛を注げり。革命まさに暴れて恐怖の代は人を斬る草の如く飢へ渇きたる斷頭機も人の血に饜けるの時に當り、ナルボーンは一にスタアル女史の庇護によつて生命を全ふし、後英國に奔るに及びても同じく英國に奔りしスタアル女史の爲めに飢へざるを得たれ共、ナルボーン元來輕薄なる巴里男子なれば、輕々に女史との關係を始めし如く亦輕々に之を終り、女史をして內に療す可からざるの傷を懷かしめたり。次ぎに女史は其才名と經海とを以て近代に有名なるベンヂヤミンコンスタンに向つて其心を注げり。スタアル男爵死するの後、コンスタンは女史に結婚を求むるに到りぬ。然れども女史は姓名を變へずしてよくば兎も角も、若しマダム、ド、スタアルてふ姓氏を變ふる時は爲めに全歐洲の迷惑となる可ければ（其抱負の太甚しきを見よ）とて結婚の事は沙汰やみとなりぬ。然も女史がコンスタン夫人とならざりしものは、偏り右の仔細によるのみならず、女史蓋し妻としても情婦としても共に棲みよからざるの婦人なりければ、コンスタンとの關係も亦面白からぬ事の多かりしなり。然して此婦人の力量大なるや、才華佛國を驚動したるコンスタンをして幾度か其縺鎖を脫し去らんと欲して終に去るを得ざらしめし程なりき。後コンスタンは「アドルフ」てふ一篇の名小說を著はして、陰々に自個とスタアル夫人の關係を說き、夫人に對して復讎をなせり。千八百〇五年マダム、ド、スタアルの意太利にあるや、熱く詩人モンチーに愛着し、女史は例の如く壓制的命令を下して、來りて吾に從へ、吾門弟となりて、汝が文才を進めよと、促したるも、事行はれずして水泡に歸しぬ。

千八百十年女史巳に四十五歳、自から「吾心の門戸は

閉ちたり」と云へる時に當り、女史は忽ち亦瑞西ゼチヴァの年少貴族ヂアン、ド、ロッカに向て庇護的愛情を注げり。ロッカは曾て佛軍に從て西班牙に轉戰し、拔群の手柄を顯はし、百死千傷の間より恙なく歸り來れる者。其齡は殆んど母子の相違あるに拘はらず、ロッカは一意スタアル夫人に事へ、女史は一意ロッカを憐れみ、眞實の夫妻の如く棲みぬ。然れども女史は吾位置の高きを思ひ歐洲の眼は一に己れに注げるを思ひ、其年配にして己れよりも遙に年少き男子に嫁せるを人に知らしむるを慙ぢ、名を變ふることも男爵夫人の稱を除くことも肯ぜず。瑞西を除くの外は、到る處に其結婚の事を隱蔽し、ロッカア夫人と呼はれむよりも、寧ろ情人と共に私生の女を挈へて旅行する者と思はれむことを擇べり。結婚は女史の死後に到て公にせられぬ。

余輩は斯に此有名なる婦人の暗らき半面を窺へり。余輩は此處に男子の才、男子の識、男子の抱負を有して其の情に弱きことと甚しき、其制裁なきことと甚しき、謙和優美の德と風とを有せざるの甚しき一偉婦人を見たり。其欠點や實に是れ其國民の特質を代表し其時代を代表せるものあり、盡く以て女史を責む可からざる所ありとするも、此一半の異點、道義的力の缺乏は、其の歷史上永く放ち得可かりし光輝の幾分を掩ひたるは、固に惜む可きの事にあらずや。

科學

世界の怪物

妖怪と云ふもの世にありとせば、前世界の動物をこそ妖怪と云ふべけれ。若し我等が試みに目をねむりて、前世界にかへりて其動物を見たりと假定めんには、驚くべきものの我等が目の前に夥しからん。

我等が住居する世界には一度植物の時代と動物の時代となりしが、その時代の植物の埋もれたるものが今日の石炭となりて堀らるゝ如く、昔の動物も所々の土中より堀り出だされ、學問の助とはなるなり。その頃の一時代の中に蛇の時代と稱せらるゝ時代あり。その時代には今日我等人類の生存する如く大なる鰐魚恐ろしき蜥蜴或は驚くべき龜の如きもの、この世界に滿ち滿ちたり。今こそ蜥蜴と云へば、石垣の間を出入し、人の足にて蹈みもし、小兒の手にて打ち殺しもすべけれども、蛇の時代には蜥蜴の大さは、皆な今の馬の如きものなりき。砂の中にその足跡の付きし者、固たまりて化石となりたるものを見る時はその時代を明かに知り得べしと云ふ。また蜥蜴の一種類にして、水陸兩性のものあり。大さ鯨の如くして、鋭き齒あり。今より考ふるに、時々陸に上り來りて、鰐魚が虎を捕ふる如くにして他の動物を取りて、その骨迄も碎きつゝ食する樣は、如何にも慘酷に且つ恐ろしかりしを想像するに餘りあり。

それよりも奇妙なるは、羽毛の生したる蛇なり。今もし我等人類の手の指が二三尺も長くなり、小指の先より足の先迄、厚き毛を生じ一本の齒にても通常の人間の口には入らざる位の大なる尖りたる齒が幾本となく口に生へ、蝙蝠の如き羽翼を以て空中を走ると假定せよ。如何に大なる蝙蝠にあらずや。羽毛のある蛇の中には、人間よりも大にして、その羽翼の長さ一丈二尺に達せるものあり。されど中には鳥の大さにも至らざる位の小さきものもありき。

ロシヤの北部のレナと云ふ所の河の邊にて、マンマスと云ふ獸の角を發見したる事ありしが、その角の長さ十丈餘、目方は百六十ポンドもありき。この巨大なる獸は、如何にして棲息せしかと云ふに、その角を以て土龍の如く河邊の土を堀りて、其中に棲息せり。今日

も尙ほシベリヤの海岸に行く時は、その骨、角等は、幾個ともなく發掘せられ、もはや珍奇のものとして保存せらるゝに止まらずして、その齒とその角は、共に舟に乘せて英國に送り、象牙細工に賣買せらる。時としては其皮肉等も氷結して、其儘に殘りしものあり。

一時南部アメリカにて繁成なしゝメガデリアムと稱する動物あり。動物學者が之に「恐ろしき獸」なる名をつけたる丈ありて、その足の丸さのみにても、肥りたる人間の躰の丸さに過ぎたり。この獸は後の二本の足と、尾とにて、殆ど三本の足の動物の如くして立ち、大木の枝を折り、あるひは之を安すく〳〵と根拔きになす。其樣の恐ろしさは、中々北海の熊の恐ろしきには比ぶべくもあらず。その牙は誠に奇妙なる形をなして通常牙は上顋に付きたるものなれども此の獸の牙は、下顋にあつて、しかも下の方にそりたれば、唇のそり返りたる樣、得も言はれぬおかしき外見をなせり。

我等はかゝる怪動物の棲息せし昔を考へ、文明の今日を比らべ、世界の如何に不可思議なるかを考ふべきなり。

文藝



歌方姫

嵯峨のや主人

第四章

剣の齒うへて峙つ劔ヶ峰、
巖に雲やかゝるらん。
わけのぼる道は何處ぞ松の風?

落葉や秋の霜ならん
雲端の巖はなれて鷲一羽、
なに狙ひてや高飛する？
頂に寨搆ふる今惡路、
なにおちこちの里おどす？
いぶかしや雲の高峯の木影より、
烟ほそ〴〵たち昇る？
誰がふくぞ角笛の音の山彥に、
木精するこそ哀なれ。
山豪が草の影野の小屋出て、
物捕せんと友を呼ぶなり。
いざさらば高峯の霜をふみしめて、
賊の在所を尋ねなん。

◦　◦　◦　◦　◦　◦

心强くも歌方姬、
小笹の霜をかきわけて、
崖のそば道ふみ昇れば、
あら物凄の深山哉！
雲千仭の谷より湧き、
瀧萬仭の峰より落つる。
山亦山、
誰が刀して削りなせる。
水亦水、
誰が筆染て畫きなせる。
人跡絶えて風寒く、
猿鳴く聲いと悲し。
折しもあれや何處より歟、
賤が妻木の斧の音、
丁々として山更に靜なり。

◦　◦　◦　◦　◦　◦

のう里人に物問はん、
都方より來りける、

國の司の御內人、
此山主に捕はれて、
憂月日をば送りにき、
と風の便りに聞つるが、
その行末や知りて居る、
敎てたべと呼ばはれば、
樵夫は斧の手を止めて、
のう其都人にてまします歟、
いたはしながら其人は、
惡路の君が降參を、
さま〳〵勸めたまひしも、
操守りて聞入れず、
巖に頭打當て、
彼世の人となりたまひき。
其は此夏の頃なりけり。
骸は谷にや打すてけん、

見し人絶えてあらぬなり。
御身はゆかりの人なる歟、
御いたはしの事よのう—
語るを聞くより歌方姫、
大地に撻と身を擲すて、
扨も〳〵恨めしや、
はる〳〵の道すがら、
涙片敷く草枕、
雨風露霜しのぎ來しも、
父を救はん爲めなるを、
其志もいたづらに、
なりけるか、なさけなやな—
旅衣の袂もちぎるゝ計、
腸を絞る御涙、
葉末に結ぶ露に露、
干ぬ間もあらず歎きしが、

岸波と斗り身を起し、
山の頂睨み見て、
おのれ憎くき今悪路！

第五章

山守の神の眠りのひまを見て、
暫時は此處に假の宿、
盗みし寳を樂しみに、
盃めぐらす今悪路、
錦のしとね敷かせつゝ、
身を曲ろくに寄せかけて、
部下の者に打向ひ、
いと傲然と語る樣、
吾人間に生を得て、
此山住の巖陰、
巨萬の富をたくはへて、
夥多の美女を捕へ來て、
酒池肉林の樂なす、
榮耀も榮花も此上なし、
是皆汝等一同の、
助に依れる所なり、
殊に昨日の夕暮に、
山ふところより汝等が、
捕へ來にける都人は、
吉野の櫻、越の雪、
匂ふ斗の姿なり、
吾此人と偕老の、
契こまやか結びなば、
倘此上も美女あまた、
此山寨に捕へ來て、
其を汝等に分け與へ、
春秋永く天廣く、

浮世樂しく汝等と、
送らん事こそ願はしけれ、
言へば一同異口同音、
そは喜ばしき事にこそ、
我等も首領の御威光を、
頭に戴きあればこそ、
麓へおりても里人に、
獅子虎のごとく敬はる、
尙此上の願には、
あまたの美女を捕へ來て、
其をわきも子と愛で見つゝ、
老ず死なずの藥得て、
千歲の末まで樂しみなん、
と言へば惡路は打笑ひ、
其は望ましき事ぞかし、
さはさりながら今俄か、

得るは容易き業ならず、
暫時は瓶の花の酒、
其をしも不死の藥ぞ、
と酌んで齡を重ねなん、
いざや〳〵と言ひさして、
玉の盃とり擧て、
酌めども盡きぬ瓶の酒、
浮める雲の榮花哉、
順逆めぐる盃の、
數重なれば惡路王、
醉に心も亂れをの、
から〳〵〳〵と高笑ひ、
あら面白の今日の酒盛、
幸ひ昨日とらへ來し、
花の都の舞姬に、
一さし舞はして酒盛の、

輿そへさするぞよかんめる、
と彼方に向ひて聲高く、
やあ誰歟ある女共、
用意果なば舞姫に、
來て舞へかしと疾う〳〵言へ、
はいと答へて一人の侍女、
妻戸をきりゝと押開く、
折しもあれやさと計り、
衣の追風にほひ來るは、
すはやゆかしや都人よ、
あら方々美しやのう—

第六章

憐なる哉歌方姫、
昨日は金殿玉樓に、
隙間の風をいとひし身も、
今は東路のはてしなる、
鬼住む山の奥に來て、
嵐に貌を吹かせつゝ、
霜を悲しむ浮身の果、
水干に烏帽子して、
黄金飾の太刀をはき、
羅綾の袂ひるがへして、
男舞をぞ舞ひたまふ、
眉の双蛾は遠山の、
霞を呼びてにほはしく、
丈の黒髮は蒼海の、
波をたゝへて肩にたる、
眼に星の影をとめ、
唇に花の香をふくむ、
姿は月なれや、姿は月なれや、
霓裳羽衣の舞の曲、
其一節こそ面白けれ」

實にや人の身はかげろふの、
宵べ斗の命なるを、
戀せぬ人こそ愚なれ、
露の宿の薄原、
尾花は露をいとほしみ、
露は尾花を戀ふとかや、
草枕、故郷を出て、
陸奥の、信夫に堪へぬ、
憂旅路も、戀故なれば、
いとはじな、戀故なれば、
いとはじな、
はにふの小屋のいぶせきも、
人の心のおく深き、
其情こそ嬉しけれ、
さればやがてぞわれも君と、
君と我も、露、情、

深き契の露の床、
嬉しき夢をば結ばまし、
あゝ嬉しき夢をば、
結ばゝ床に月の影、
汲みなば底に情の露、
あゝ露情、深き思を、
人や知る、深き思を、
人や知る、
繰返し、繰返して歌ひつゝ、
悪路の方をかへり見て、
目元に運ぶ情の露、
あゝ傾城傾國よ！
悪路は魂とろける斗、
恍惚として心酔ひ、
夢に夢見る心地なり、
舞の終るを待ち兼て、

のろ姫よこゝへ來ませ、
此處へ來まして酌してたまへ、
御身の酌にて酒汲みなば、
天の甘露をこんずに受て、
天女と酌むとや思はれなん、
いざとう〳〵と傍に招けば、
姫は悪路の傍に坐して、
玉をやのべし白き手を、
讐敵の膝にそと置きつ、
醉をすゝむる盃は、
漢月袖に靜なり、
目元に運ぶ情には、
國傾むくる力あり、
悪路は魂愈亂れて、
部下の見る目憚からず、
恍惚として立辜りつゝ、
汝等暫く退ぞきね、
われ堪へ難く醉ぬれば、
介抱姫に頼むなり、
いざ是よりは玉の床、
比翼連理の語らひせん、
姫の御手をかいとりて、
帳内深く入りにける、
折しも嵐さッと音して、
月むら雲にかくれけり、
月むら雲にかくれけり、

第七章

轟くは何の音ぞや小夜深けて、
久方の天のくだけてかけや飛ぶ、
あらかねの地のわれ裂けて火ぞや吹く、
魔の吹きしあかしま風の荒さびて、
鳴神の山の根ゆする音凄く、

天地漠々霧濛々！
聞け！天と魔は雲の波の上、
血潮、血煙、生死、叫ぶ！
見よ！雲端のいなびかり、
一飛劍ケ峯の巖をきる、
嗚呼夢一時

善惡のいくさやみて、
小夜嵐
過ゆけば雲も消へて、
峯には殘る月の影、
誰そや、巖の常陰の岨道を、
吹風のごと走來るは、
殘月におどろの髪をふり亂し、
紅の血潮したゝる首さげて、
おく霜の氷の刄手にふりて、
美人一個巖頭をゆく。

（完）

雨後の秋の月

筑峯女史

秋のあはれのつれ〳〵をなぐさめんよすがもがなと、ひとり文机にむかひ何くれとなくよろづの文どもくり返え〳〵詠め侍れど、いざと思ふふしもなく、いとこふじにたり、かくする夕つかたより雨もやう〳〵晴れ、むぐらに住む虫どもおのがじじ鳴出て、月も雲間をほのめき出て、何となう景色たちて見ければ、ひとり草深き底にをり立ちそこはかとなくさまよいありき侍るに、まがきに咲ける萩の枝もたはゝに露いとおもげなる風情もなか〳〵におかしと見るに、時ならぬ二ツ三ツ螢の光りければ、いてや今夜のなぐさみにせんものとひとりこゝろにうなづき、いとほこり顔に手さしのべとらへんとし侍るに、螢にはあらで萩の葉のなごりの露に月の光の宿りたるなれば、影だになくなりうせ、さしのべし手先をかくさんもあへなくて、かなた

の空を仰ぎ見れば雲井の月いときよらに照りまさり、げにわらはか淺きふるまいを笑ふかごとく、いと恥かしく、友かきもゐあはせつらんにはいかばかりかもの笑ひにこそと、今更あさましくも口惜きかぎりなれ、はてはさま〲浮世のはかなさを思ひ抔してはのか室に立かへらんすべもうちわすれあかておかめ侍るをりしも、いとゞふる里の空なつかしう、こゝろ涙を催ふし、露けき袖志ぼりもあへず、吹來る秋風の身にしむに驚き、もとの文机がもとにいたりつきぬる比は、月は山の端ちかくかたむき侍りてなん、

クルイロウフの寓意詩

笛仙子譯

鴉と而して狐

もう幾度世間に諂諛の卑しい事、わるい事を言つた歟知れないが、其で居て昔も今も同じ事、諂諛使は矢張甘い穴を見附ますよ。



鴉が何處から歟牛酪の片を拾ッて來て樅の木にとまり込み、其を喫やうとして喫もせず、くはへたなりで何歟考へて居ました、此時生憎向ふを狐が通つたが、牛酪の香が紛として彼足を止めて見ると鴉が樅の木へ止まッて、今や牛酪をたべやうとして居ます、甘さうだな！其處でおベッか使、爪立足で木の下へ立寄り、尻尾をふり廻はしながら、傍目もふらず、欲しさうに鴉の方を見て居たが、やがてさもやさしさうな聲で、愛らしい者よ、まあ何といふ美しいのだらう、君は、襟元といひ、目元といひ、眞成に物語にでも在りさうだ、其鼻の風から、咽喉の具合、何といふまあ樣

子の宜のだらう、定めし聲も天人の樣に宜からう、まあ一ッ歌ひたまへ、其樣に羞しがらずに、君の樣に美しくては、佶度歌も黑人だらう、眞成に君は鳥の中の王だぜ、と言ひました、音樂家褒められて、面くらひ、嬉しさで息もつまる計、狐の諂諛にふわと乘ッて、一聲くわうと鳴きました、其處で牛酪は口より落ちました。おべッか使はまあ此樣ものです。

蛙と而して牛



蛙が野原で牛を見た所、彼は中々の羨望家故、一番牛と太り加減を比べ合ッて見やうと思ひ付ました、「如何だい、見てくれ、兄弟、予と牛とどッちが太ッて居る歟」他のがいふには「否遠く及ばないね。」「さう歟、まて〳〵、今もッと膨れて見せる、如何だい今度は、隨分太ッただらう？」「え、何だ歟同じ樣だぜ。」「さう歟、其では今度は如何だい」「矢張先の通りだ。」其處で羨望家が、膨れたの膨れないと言ッて、一生懸命ふくれました、然し如何計膨れても、牛程ふくれる事は出來ませんでした、而して餘りに腹を張たので、とう〳〵腹が張裂て死でしまひました。

此樣な例は世間には幾らもあります、ですもの何で驚くに及びませう、小商人が名高い紳商の樣に奢り散したり、貧乏士族が貴族の眞似をしたりするのは。

小箱



世間にはざッと考へて物に取かゝるべき所を、やれ勞力を要するの、やれ學識を要するの、と仰山にする事が多ひものです。」

ある人の元へ細工人が小箱を送

ッて來ました、此小箱は仕上が如何にも手ぎはよく、飾が如何にも立派でした、で多くの人が集まッて、如何にも珍らしさうに眺めて居ました、所へ器械學者が這入て來ました、一目小箱を見てやあ此小箱には秘傳があるな、左樣だ鍵がない、よし／＼私が今開てお目にかける、左樣だ、左樣だ、佶度秘傳が在る、鍵がないもの、おや、何故其樣にお笑ひなさる、此秘傳が見附かるまいと思召すの歟、宜しい今開てお目にかけるから、之も器械學上、何歟の益になるであらう、と言ッて小箱をひねくり、あちこちまはして見て、腦髓を痛めて居ます、釘を引張て見たり、棒を摘んで見たり、いろ／＼の事をして居ます、傍の者が其樣子を見て、さも馬鹿らしさうに首をふッて居ます、或は呵いたり、或は目配をして笑ッたりして居るが、學者は一生懸命、今度は小箱を耳へ當がッて、斯でもないな、其なら斯か、否さうでもないな、と色々苦心して汗をしと〻にかいて居るが、如何も分らない、とう／＼骨折損のくたびれまうけ、小箱を見限ッて退ぞきました。然し小箱には秘傳はないので、唯蓋をとれば直開るのです。

路芝の露

春晝、秋宵、風物に對して坐ろに身のこし方行く末など思ふの時、世また

　　父母のかしらかきなでさくあれと
　　　いひしこと葉ぞ忘れかねつる。

の情なきものある乎。矧してや其間に世におそろしき變事の出で來たる日あらば、彼我の悲しみは如何ばかりぞ。想ひやるだに豈いたはしからざらんや。

今は昔あはれにも又やさしき心の花橘のかぐはしき名をとゞめける物語あり。

仁明の帝の御字に橘逸勢とて世に三人とまでかぞへら

れし能書の人承和九年といふに伴健岑がよしなき企に事連りて伊豆の國へ流されけるが、逸勢に一人の女ありき。一夜の旅の別れ路さへ、物悲しきならひなるを、これは配處に赴きて何時逢ふべしとも思ひ定めぬ別れなれば、遠き東の旅の空をいかでか父のみ往すべき、彼女は父が配處にまで從ひ行かまく請ひける。

去れども父は罪ありて配流せらるゝ身なりければ心に任せず、とはいへ彼女は獨りとゞまるべきにあらさりければ、父が監送せらるゝを見て泣き悲み、徒歩してあとをおひすがり行きぬ。

監送の役人之を見ていたく叱りて去なしけるに、彼女はとりつく島もなみだの海の袖袂晝は伏し夜は行き、踏みもならはぬ東路を、かよはき女の脚の疲ながらもあとを慕ひける。心なき路芝も涙の露團々たり。

斯くて逸勢は遠江の國まで送られ行きけるが、囚れの身の病に僵れ、終に歸らぬ旅に出て立ちける。アヽ萬苦千辛して遙々あとを慕ひ來りし彼女は此時如何に悲しかりつるぞ。

彼女は泣く〱父の遺骸を驛下に埋め、其側に露を凌ぐばかりなる廬を結び、花匂ひ鳥歌ふなる人生の春をば餘所に見なしつゝ、ふさやかなる緑りの黑髪を切りはらひて一向に父の跡を吊ひけり。

朝々又夜々、春風吹き老て墓石の苔古りぬ。去り去る人、來り來る人、見るもの袖を濡らさぬはなかりき。

其後嘉祥三年詔ありて逸勢が罪ゆり、正五位下を贈られて都に歸葬することを赦されけるに、此時いそ〱として自から柩を負ひ來りし彼女の喜びは、思へば世にもあはれなる喜びなりけり。



繪畫

丹青叢談（承前）

蕉隱生

十六、凡そ技に秀て、藝に妙なるものは尋常の繩墨もてつなぐべきものにあらず、英一蝶の如きはその尤なるものなり、一蝶初めの名を信香といひ潮湖と號しき、年十五初めて畫法を狩野安信に學ぶ、囊の螢、窓の雪、日夜たゆみなく勉めけるほどに技は大に進みぬ、されど一蝶は師授の規格を死守するを屑とせず、しば〳〵狩野派のそとに飛び揚るあり、これより師と相協はずいさゝかの事にかこつけて遂に師弟の約を絶つにいたり、閑雲野鶴の身となりて、これよりおのが欲するまゝに振舞ひぬ、年四十七の冬なりき、朝妻船の圖を作りて時の將軍家を諷しけるに、忽ち罪せられ三宅島に流されたり、一蝶に生母あり剃髪して妙壽といふ、年既に老ひたり、一蝶これに事ること厚し、はじめ罪を得しとき、その侍從の人なきを悲しみて友となる横谷宗珉寶井其角



にあづけて、やしないをたのみ置ぬ、されば島の中に

ありても母の事のみ思ひ出られていかにもして世を安らけく送らしめはやとて、便船あることにおのがものせし畫を母の許に送り、そを賣らしめて友人の費をはふきぬ、一蝶蠻烟蠻雨のうちにあること十二年寶永六年大赦に逢ひて江戸にかへり、なつかしき母のすこやかなりし躰をみて互にその無事を祝せしときその喜や如何なりけむ、そのうれしや如何なりけむ、一蝶享保九年病を以てみまかりぬ、年七十三その辭世にいふ「まきらかす浮世のわざの色どりもありとや月のうす墨のそら、」

十七、人とはぬ片山里、里遠き鄙のあら野に至ること應擧とさへいへば、たれも畫師の名なるをしるなるべし、げに、應擧は丹青塲裏の一大名家にして寫生派の創始なり、その臥猪の逸話はいふまでもなく寫生につきての逸事は皆人の諗聞する處なり、今われはさる人より聞得たる未だ世にしられぬ一事實を語らん、應擧さるかたより枕屏風に何にてもよければ筆のついでに畫き給はれと依頼をうけ、心よくうへない置ながら待てども〳〵未だ畫かず、たのみし人も待ちあぐみて日夜使を走らせ一日も早く畫きたまはれ、謝禮は十分になさんとて責めかけれども倘畫かで漸く三年目にして、たのみ給ひし屏風は出來上りぬといひ來る、たのみし人大に喜びて三



圓山應擧像

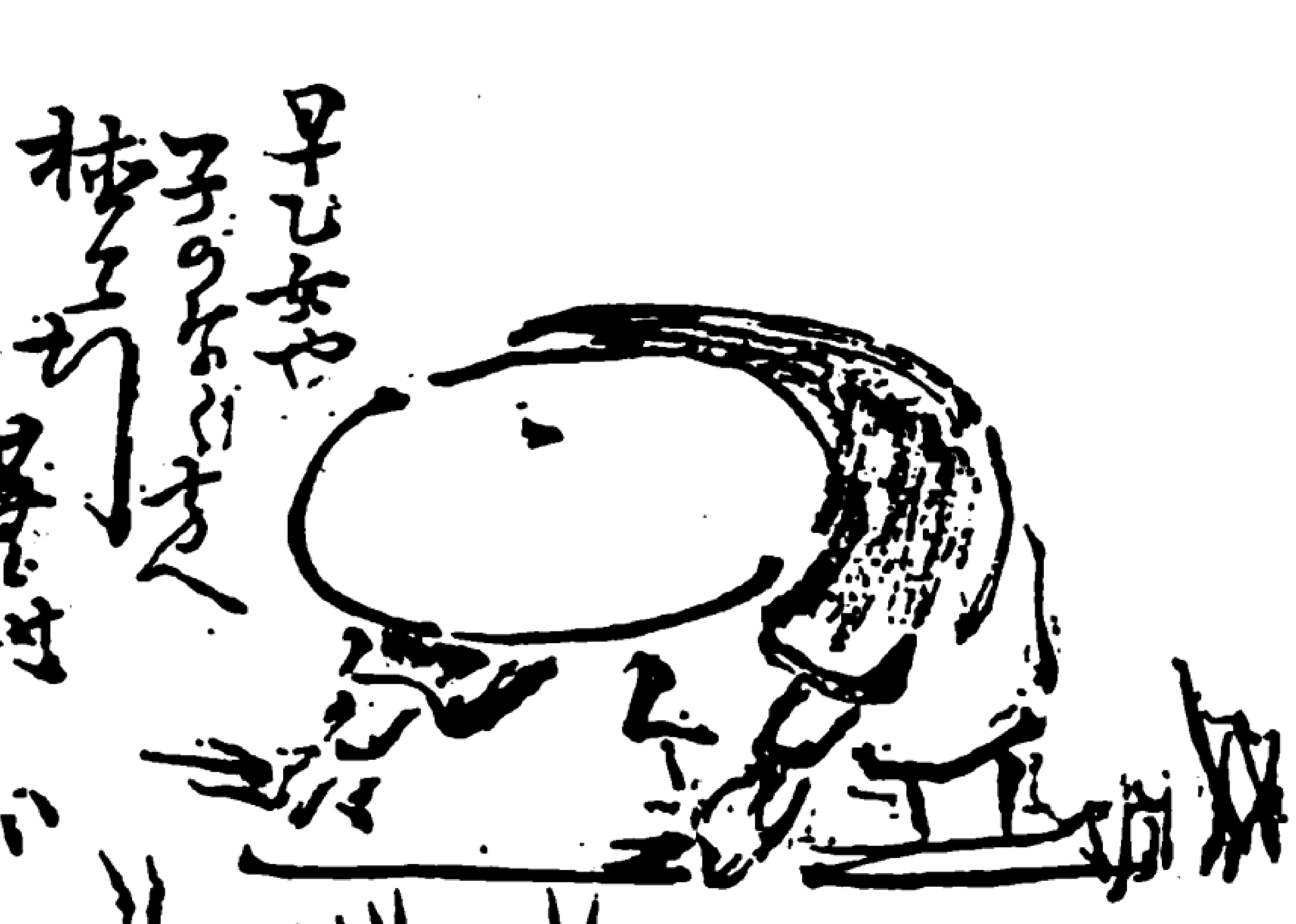
年も費やせしことなればさそかし見事なる精密なる繪のなりしならんとて、とり寄せてみるに、こはいかに、土筆二三本、ちさ、一つ二つを片隅の方に書きたるばかりなり、あまりの事に腹立しく、早速應擧に人をやりて、三年の長き月日をまち〳〵て如何なるあてやかなる畫のなる事かと樂みゐたりしかいま漸く出來しをみれば、土筆二三本とは情けなきわさならずや、この上に今少し草花、禽鳥なすを畫き添へ給へといふ、應擧靜に、いな、もはやかゝでやみなむ、唯居間にたて置きたまはゝ、われいま言はずとも筆のすくなくとよきわけを知りたまふべしといふに、たのみし人はせん方なくいふがまゝになし置きぬ、次の日、不圖屛風をたて置きし居間にいり來るに、何ともしらず、えもいはれぬよき香ひの脈々として鼻を撲ち來る、何人のしはざに、香などを燻き、おきしやと、四邊見廻せどもさるべき器もなし、家のものに問ひこゝろみれども皆しらず、いぶかしき事もあるものかなと思ひゐながらいろ〳〵考るに、例の屛風より香を放つにたがいなきをしりて、みづから應擧に逢ひ、その事をかたる、應擧笑を含みて、されば こそ筆數の少きもこれ故なり、その香を放つゆゑよしは、三年の間毎日〳〵丁子香を引きけるが故なりといはれて、はじめて悟り大にその意匠を感じけるとなむ、

十八、長澤蘆雪名は魚字は氷計淀の藩士なり、應擧の門人となりて毎朝淀より京都四條の應擧が宅へ通ふことなり、ある冬の朝なりき、寒氣殊にはげしく、霜にあひたる木々の梢、つらゝかゝれる家々の軒、みるさへ寒みの増りける、かゝる時にも蘆雪は數里の道を遠しとせず例の如く通ひ來る、路すから何けなく傍らの小川をみれば水音絶えて氷ゐたるその中に一疋の魚あり、一身をしられて泳ぎ游


蘆雪魚字印

はんすへなくいとくるしげにみえける蘆雪これを憐みて、救ひやらんとおもへども氷かたくとさしていかんともすべきよしなく、こゝろ殘りの事ながらそのまゝ京に登り應擧の家に在て、その夕ぐれの歸るさに、朝の魚を思ひいでていかにしつると立寄りみれば、氷漸く々に解て魚はやゝ自在をえて樂しめるものゝ如し、翌日此事を應擧に語りけるに應擧がいふ眞に面白き話かな、我が畫に於けるもまたしかり、はじめ師に從ふて學ぶことこゝに年あり、その內艱苦の作行をつみて、やう〳〵氷の解けたらんが如く今は畫の自由を得たりと思ふ處あり、おの〳〵もその心得あるべきことぞと、蘆雪其意を悟りて深くこのことに感じ、遂に名を魚と稱し字を氷計となづけ水の內に魚の字の印をさへ用いぬ、これより螢雪の功をつみ殆んど應擧を凌んとするに到りき、しかるに天此人に年をかさず、不幸短命にして、空しく前途の壯圖を懷いて永眠に就きぬ、惜むべきの至りといふべし、ある人蘆雪が畫に細密なるを見ず、かれは描くことを得ざる故にやといふをきゝて、蘆雪方寸の中に百鳥を畫きしに人はじめてその精密なるを感じあへりといふ、

十九、俳諧を以て名高き蕪村謝長庚は攝津東成郷の人なり、はじめ丹後に遊びて與謝に居る、その山水を愛して、とりて姓となす、後平安に住す、かつて某寺に開龕ありて、古書畫類十幅を展覽す、蕪村日々行てこれを見るに僧悦ていふやう、そこもとはまことに佛を信ずる人なり、は



じめてこゝを開きてより一日として來給はざはなるし、隨喜もこゝに至らば必ず彌陀の應護あらむと、蕪村笑ひて、われも決して佛を信ぜざるにはあらねども佛に侫ふが如きことはなすを好まず、唯毎日こゝに來れるは文衡山の山水の畵のすぐれてよきにせめて後々まで忘れざらんやう見覺置かんとてさてはこの日頃一日も缺さできつるなりといはれて、僧はかへす言の葉もなくしてやみぬ、

二十、伊藤若冲名は汝鈞字は景和京師の人なり、初じめ狩野氏に學びて、後ち諸家の古蹟を摸しゐたりしが、ある時ふと悟りて寫せし粉本を悉く燒きはらひ、造化を師となすにまされることなしとて、これより寫生を專らとし、まづ日常人の眼に觸るゝものより始めんとて、雞數十疋を飼ひて常にその靜動をうかゝひ、之を寫ことと數年にして能くその態を窮め得たり、後深草石峯寺の側にすまひて、その畵を以て米一斗にかへて身を終りしといふ、故に斗米庵の號あり、また石像の五百羅漢を造りて石峯寺の中にたつ、いまその像をみるに往々自然にまかせて多くの彫琢を加へさるところ、かへりて趣致あり、

二十一、塩川文麟は京都の人にして近世の名家なり。性磊落不羈人と語るに城府を設けず、文麟家を鴨の川きしに起して朝な夕な三十六峯の雲烟に出沒するさまをみて、おのか畵中のものとなし、又、池を作りて鯉魚をやしなひ、その游泳のさまを寫してその眞趣を得たりき、かつて文麟、おのか居間にありてしきりに何やら習ふさまなり、何人にてもゝしこの居間に入り來るものあれば直に机の下におしやりて少しも人に見せしめず、門人就て、そのゆゑを尋ぬるものあれば笑を含みて、いまは詳に明かさゝるべし、されどわれなしとげたるの曉には、そこもと等にも語らんとていはされば門人しいても問ひかねそのまゝにしてやみぬ、

後その法を得たりとて出して見せけるを、



門人等うちつどひて、先生の名手にして尚いかなるものを習ふやらむとて、みれば銅版摺の西洋畫なりしといふ、その畫技に勉めたること大むねこのたぐひなり、

家政

小兒の刑罰につきての父母の心得（承前）

正當なる罰

肉躰の罰は勿論小供の理解力の生ぜし上にて爲すべき事なり。三歳や二歳なる稚子になすべき事にあらず。故に若し小供をして、眞に己れが惡を覺らしめ、過ちを後改せしめし上は、或は罰として母の許す迄母の膝下を去る能はざらしめ、親しく善惡の報ひを比較して語り聞かしめ、或は區域を定めて、庭の掃除をなさしめ、もしくは數日間、友人の遊戯をたゝしむ等、時と塲合を考へて害なきこらしめを行ふべし。然しながら父母の善良なるにかゝはらず、學校友人の見習等によ

り、小供の性質を害して、父母の敎訓に隨はざる小供等あらば、つめる位の痛を與へさるを得ざる塲合もあらん。されど何にせよ、健康を害し小供の性質を曲ぐるか如き罰は、注意して避けざるべからず。それのみならず若し小供の父母の命に隨はざる如き事あるときは父母は自ら顧み、余が命令は正しきや、こは小供になさしめざるべからざるやを考へし上にて、その命令正しき時は、如何に小供に氣の毒なる塲合にも、屈せずして之をなし通すべし。

父母たる人のために心かくべき一事は、小供に間食をなさしむるは、あしゝとの養生法を守らんが爲め、小供が菓子をほしがる時前後を顧みず、之を叱する事なり。元より間食はあしゝと雖、小供は滿腹する時に食を求めず、空腹の時はこらゆる事を知らざる故に、食すべき食後の時に充分の菓子を與へて能く云ひ聞せ、正當の時の外には與へざる事を知らしめ、然る後間食を求むる時は之を叱るべし。さなくして、むやみに叱るが如きは、小供に野卑なる心、曲りたる心を起さしめ、父母の目を盗むの恐れあり。こは經驗ある人の已に知る所なれども、若かき父母の勢にまかせて、往々にして殘酷なるしつけをなす事あれば、その注意に迄かくは記すなり。

記臆すべき一事

最後に記臆すべき一事あり。そは小供の漸く成長したる後、いつまでも小供らしく叱らざる事なり。已に長したれば、成るべく自ら考ふべき時と、自ら制する力と、自ら改悔するの力を與ふるを必要とす。たゞその力を養はしむるため、過ちに對する改悔法、慾を制する自制法等を敎へ、愛心を以て忠告をなすにあり。賢こき母は易すく怒らず。されど怒りたる時は、その恐ろしさ云はん方なくして、再び罪を犯すの心根を斷たしむ。是れその幼兒と、長兒を敎ふるに當り、注意記

訓すべきの事柄なりとす。

小供を叱ると云ふとは、かく精密なる思考を要するが故に、余は學校の教師たる者に望む處あり。凡て學校の教師は、母に次ぎて小供の性質に關係を有する者なり。若し小供の父母と同一の考を以て、同一の注意を以て、之を教訓せずんば、夫妻心を同ふせずして種子を蒔ける例へ談の如くならん。妻は夫に隠して、葱を蒔き、夫は妻に告けずして豆を蒔き、夫は日々己が蒔きし處に行きて豆の出でん事を待ちつゝ、豆に非らざる雜草は、すべて之を拔き去り、妻は夫に隠つゝ、畑に行き、葱の出でん事を欲して、他の青きものは、凡て之を拔けり。而して妻は夫の豆の苗を拔き、夫は妻の葱の芽を摘めり。遂ひに一年たちて何の得る處もなかりしと云ふ談あり。かく學校教師は親しく、その小供の父母の家風を知り、家風の良き處は延ばし、悪しき處は悪しき様に矯むるとを爲さゝれば、家にて教ふる處は、教師之をあしゝとして、矯めんと欲し、教師の云ふ處、家にて之を喜はず。かくして小供はその爲すべき處を失なひ、小さき心中何の止まるものなきの不平に至らん。これ父母の方にても注意すべき問題にして、學校教師は一々小供の家を訪ふべき餘暇を有たざる時は、父母自ら行きてその家風を傳たへて、相當なる教育を與へくるゝ様請ふべし。老祖父の悪癖に困るを見ば、宜くその子供の悪癖を去るを勉むべし。大人の癖は去り難けれども、小供の時は、大人もすなをなる息子なりしなり。爵はこれ、小供か大人となりて、善とも悪ともなるを導びく、最初の教導者たるなり。

財の用ひかた

財を得るに三つの種類あり。眠りて得る錢、醒めて得

る錢、働きて得る錢の三種なり。眠りて得る錢とは己れは眠りて居るも、遊びて居るも、何程無用に用ふるも、入用に隨がひ何時にても父の紙入より引き出すを得る所謂若樣もしくはお孃樣の類を云ふ。醒めて得る錢とは、即ち中等の生活を爲す人々にして、矢鱈の無駄用ひは許されず、眠りては食し、食しては遊ぶ等の懶怠は許されざるも、少しく家事を手傳ふとか、無益のおもちやを購はざる丈けの注意ありて、常に醒めてさへ居れば、入用のものは左程の苦勞なく購ふを得る中等社會を指さす。働きて得るに至りては、我等が考へも出來ざる苦を有するものあり。或る家に雇はれて行く婆々あり。早くより夫を失なひ、家には僅かに十一才の娘と、七才の男子を有せり。彼は下女に雇はれて糊口をなせども、雇ひ人のなき時は、男子と同じく煉瓦を運び、或は車を引き、或る時は草を刈り、或る時は豆を賣りなどして、僅かに生活をなせり。その十一才の女は、母の留守には弟を携へて兵士の用ゆる石盤ふきを內職となし、百個二錢五厘の賃錢を得て、母を助すくる傍、弟と自分の飯を炊き、菜を煮などなして、所謂貴族及中等社會の夢にも知らざる困難なる働を爲せり。是等を働によりて錢を得る種類とす。

○　○　○　○　○

困難なる働をなして生活する婦人は、下駄屋の前に立ち、下駄の價高くして善く破るゝには困るとつぶやけり。而して貴族的婦人は云へり、此店には安きもの計りなり、彼處には善き品なし、何處をさがしても、氣に入りたる下駄のなきには困れり、余は今の下駄にはもはやはき飽きたり、妹に讓るの外なしと。等しく下駄の一足なれども、その云ふ所の異なるによりて、その錢の價の異なるを知るべきなり。然らば勞働社會が、金錢を有益に用ひ、貴族社會が之を無益に用ゆるかと云ふに然からず、果物の未だ全く熟せずして、所

謂初物の時分に先づ顯はるゝは、貧民町の一文菓子屋なり。その高價の菓物は、先づ貧民の子供によりて試みられ。然る後に貴族社會に入り、終りに中等社會の用ふる所となる、貧民の子供が困難なる勞働によりて得たる一日一錢若しくは二錢の金は、何に用ふるやと問ふに、恐くこの無益にして、且つ胃腸を害すべき菓子果物に用ひらる。心あるものその母に向ひて、彼等の菓子を買ふ事を制すれば、答へらく我等が子供は讀書の樂しみもなく、美衣美服の樂もなし。若し之を制すれば、遂に盗心を起すの恐れあり、故に出來得る限りは、金を出して、彼等の望みに任かすなりと。折角に骨折りて得たる金は、かく無益に用ひらる。貴族的の人々が目の慾、耳の慾に勵まされて、愚かなる器具、無益なる遊戯に金錢を捨つるは云ふ迄もなし。彼と是に比較して、殆ど使用に當を得たるは、中等社會の人々にして、慈善のために義捐をなすは、又多くは彼等の内にあり。彼等は貧民社會の如く、金錢を得るに難からず、さりとて貴族社會の如く之を用ふに易からず。下を見て落つるの恐れあり。上を見て上るの望みあり。之れがために彼等は望みの爲めに生活をなして、無益の財を費やさず、三種の中にては、先づ最も金錢使用の道を知りたるものゝ如し。然れども彼等の中にも尙ほ空しく用ふるもの又少なしとせず。然らば如何にせば最も使用の道を得たるかと云ふに、或る人の云へる如く

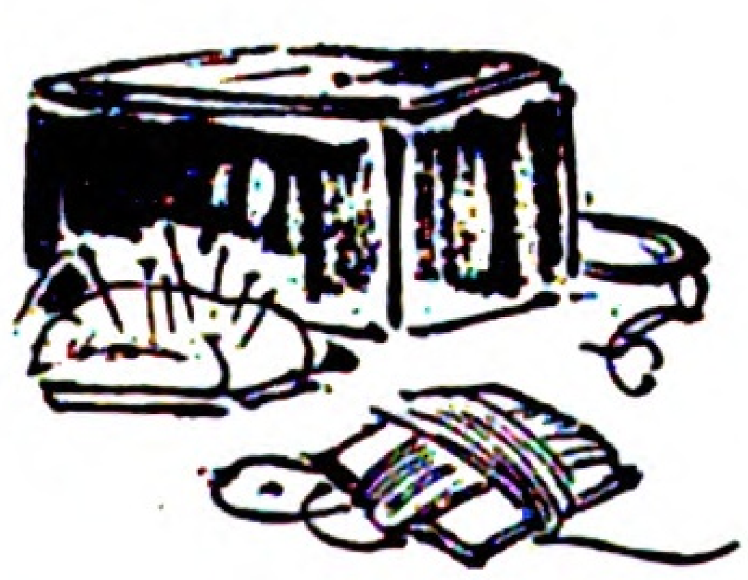
辨當の後にて五錢の菓子を食したりとも、健康の助けにもならず、十錢を以て死人に花を供へたるも、慈善にもならず。友人を呼びて氷水をふるまひたりとも、風邪をこそ起すべくして、樂しき饗應にもならず、必用なきに使ふ金は、塵の如しと云はんより、塵の價程にもならず。

只だ身に温を保つ丈けの衣服を着け、食は健康に益な

るものを撰み、少しの餘裕あらば、貯蓄の箱の中に投け込み、病氣の時は藥を買ふもよく、着物の破れたる時は之を買ふも可なり。或は水害の如き、震災の如き、不慮の災難に罹りて困る人々の爲めに一滴の涙をそへて與ふるは、最も金錢使用の法を得たるものと云ふべし。綿入の衣服を着して、火鉢の元に坐する人々は、美しき簪を求めずとも、溫度に於て何の變りもなし、されど水害に遇ひて濡れ破れたる一枚の單衣を纒て、食するに米もなく、汁もなき人々は、その簪の代價を得て、何程の利益を得るや計るべからざるなり。金錢の用ひ方とは、かゝる入用におしまず用ふる事を云ふなり。



一本の針は如何にして作らるゝや



或る家にては妻君が針仕事にて一本の針を失なひ、或る家にては、下女、或る家にては娘、或る家にては老人、一日に一本の針を失なはざるは稀なり。かく計算して平均一軒の家にて、一日に一本を失なふと假定せば、日本中にては一日一千萬本の針を用ふる計算なり。之を世界に通算せば如何に驚くべき多數にあらずや。さてその針は如何にして作らるゝやと云ふに、山より堀り出だされし時より、鍛冶屋の手を隔て、針がねの形に成る迄の手間を數ふれば、幾百の手數のかゝりしか、殆ど算ふべからざれども、その針がねより、純粋の針となる迄の手數を算

ふるも直にして、通例の針を造るにもなほ九度の手數あり。先づ第一に針がねを針の長さに切る人あり、第二には之を火中に入れて、ゆがみを直す人あり。第三に砥石にて先きを尖らすあり。第四にめどを作るために一方をしつぶす人あり。第五につぶしたる處にすじを作るあり。第六に圓ろき目どを作るあり。第七に目どの中をみがくあり。第八に鑢にてすり、針のすべを好くするあり。第九油を引くあり。其他頭の先きの切れ口を滑かにし、或は尖がりたる先きの通りを好くし、若しくはさびの出ぬ樣に手當をなす等を一々に勘定せば、幾人の手を經たるか、驚くに餘りあり。今其使用の種類を記さん。

針の使用の種類

外科醫者の針には種々あり。一種の針を以て、腫物の中を探り、又た鐵砲の丸の入りたるを探ぐる針あり。或る時は傷の口を開くもあり。時には皮下注射をなすもあり。歯の中を掃除するもあり、歯の壁を取るもあり、その針の形は用ゆる塲合によりて、各々異なり。或は圓るく、或は薄すく、或は長く、或は短く、平なるあり、曲りたるあり、直きもあり、とからざるもあり、一々集めて見るときは、そのぴか〳〵として、鋭ときには、身の毛のよだつ如きものあり。外科醫者の針のみにても、かく樣々なれども、編物の針に至りては更らに多く、その使ひ道もわからぬもの夥多あり。四本針、ひつかけ針、目どを通す針、破をつゝくる針、さし物をなす針、ふちを取る針の如き、樣々のものあり。料理人の肉をつるす針あり。最もおかしき針は室具匠或は洋服の襟を縫ふに用ふる針なり。その針の中には細目ど、長き目ど、卵形の目ど、ひき込みたる目ど、突き出たる目どの種々あり。鬘造りの針は更らに面白く、手套の皮を縫ふ針、靴の皮を縫ふ針、洋服を縫ふ針、はけ造の用ゆる針、舟の帆を縫ふ針、箒を造

る針、帽子を縫ふ針、みしんの針、是等は皆其用ひ所によりて、形も造り方も、一々異なる針にして、尙ほ世界中に用ふる針の數を算ふには、見し事もなく、用ひし事もなき針の數多し。

針の進化

ダルウ井ンと云ふ人は、人間は猿より進化せりと云ひけるが、金の針は骨、木切れ、角等より進化せしものなり。その昔、アダムとイブがエデンの花園にて、木の葉をつゞりて衣となせし頃は、如何なる針を用ひしか、或は指にてつゞりしかも知れざれども、我等の考へ得る時代となりて、針の始めは、魚などの骨を、其まゝに用ひて針となせり。それより木の枝をけづりて用ひ、後に角を以て針を造れり。スペインの針が英國に渡りしはエリサベス女王の時代なるが、それより漸く々に進化し、改良し、今はかく種々の針とはなれり。我等が何とも思はずして、衣物を縫ひ、編物を爲す一本の針如何に變化し來りたるかを、考ふる時は、實に文明の十九世紀の器械の進歩に富たる、殆どその頂上に熟達したるに驚かしむ。

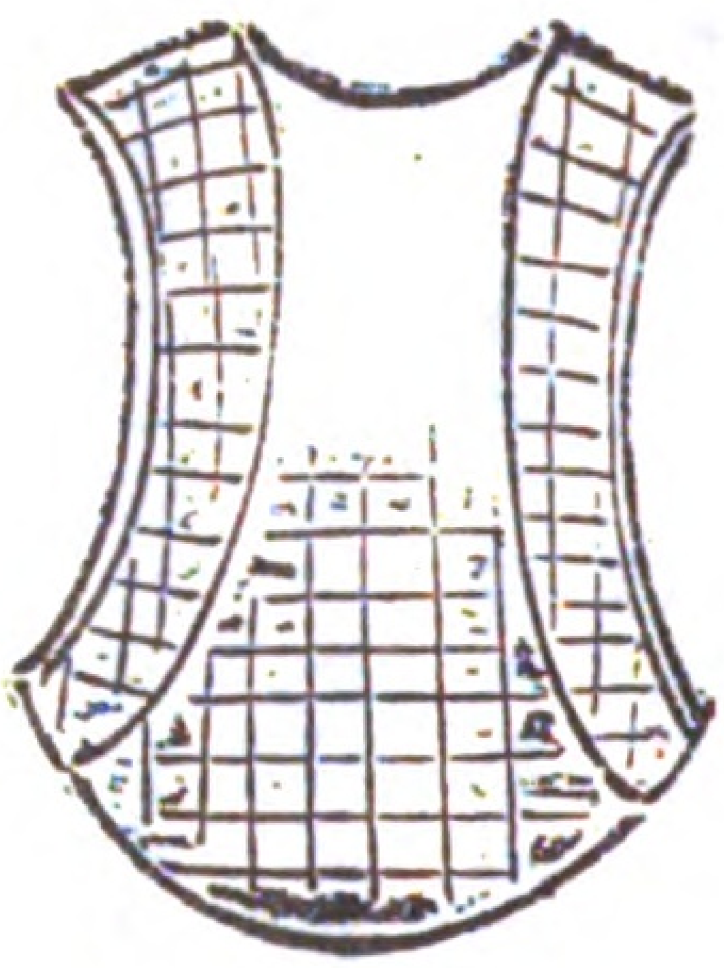
寒中の用意

冬の寒むきと、夏の暑きと、何れか苦るしと云ふに、夏になりて考ふる時は、夏の暑さを冬より甚だしと思ひ、冬となれば、夏の暑さをましなりと思ひ、所謂喉もと過ぐれば暑さわするゝの諺の如く、目前にせまりたる事を以て、尤も苦しとは思ふは人情なり。さればこの頃の時候となりては、何人もこの冬を如何にせば温かくして過ごさんかと考へざる人はあらざるべし。殊に老人、小供、病人などは、感冒をなし易く、感冒によりて持病も起り、熱病も來るべければ、寒中を温かく保護する事は、家婦たるものゝ責任なり。此る時

候に際して爲すべきは艾の胴衣を造るにあり。

艾の胴衣

表ては絹にても、何にてもよけれども、裏は黄色の木



綿を用ひて、通常の胴衣、もしくは圖の如き猿衣を縫ひ、常に綿を入るゝ如く、裏返して、表を上にし、裏を疊に付けて下に置き、之に眞綿を薄く引き、その次に艾を綿の代りに入れ、その艾の上に唐辛子二三十個を剪刀にて摘み切りて散布し、更らに眞綿を引きて裏返すべし。この胴衣は只の綿入の胴衣よりは、温さ大に勝りて、如何に寒むがる人とても寒むさを忘るゝを得べし。又もし裾の冷ゆる作人あらば、之にて腰巻を作りて腰にまかば、さながら日向温をなす時の如く、ほか〳〵として温かし。しかし唐辛子の入れ加減過ぐる時は、餘り逆上する事あれば、能く加減して入るべし。又之を衣るには木綿か金巾の下衣を一枚着してその上に着すべし。然らざれば時々洗濯をなすに困難なり。裏は黄木綿を用ふると否とによりて、大に温度を異にすと云ふ、寒さを厭ふ人々は試み給へ。次は

毛糸のずぼん

フランネル、木綿、もんぱのぱつちは、膝の屈曲に不自由なるが故に、足の太さより遥かに太く作らざるを得ざるが故に、ふご〳〵として温かならず、毛糸にて編みたるものは伸縮自在なるが故に、足に合して



製るを得べく他のものに比して、最も温かなり。殊に匍匐する小供の如きは、常に足を露はすが故に、格別温かく保護せざるべからず。ぱつちの編方にも種々あれども、最も容易なるは、圖の如く、筒に似たるものを

二つ、上部にて合せたるものなり。

戸外に音なふの禮

孟子若年の過失

人の室に入るに音なはずして入るは、甚だ失禮なる事ながら、親しき交際を爲すに連れ、漸々に禮義の亂だれ勝となるは常なれど、心得ある人々は避くべき事なり。西洋人と交際する人々は知り給ふ如く、西洋にては親子と雖も、必ず外より戸をたゝきて出入するを常とす。元より西洋の風を眞似するには非ざれども、着物を着更へつゝある室へ、他人の入り來り、甚だしきは入浴中に音なはずして戸を開く下女などあるは、甚だ不都合なり。我が國にても音なはずして入る事をよき事とは思はざるが、こは西洋と我國のみならず、文明諸國一般の禮法にして、支那の昔に於ても、又此の禮ありき、彼の賢人と呼ばれ給ひし孟子が、青年の時にてありけり、一日用事ありて何氣なく妻君の室に至りけるに、頃しも夏の最中にて、炎々たる日光燒くが如く、人々暑つさに苦るしむ折なりしかば、妻君は人なきを折として、半ば肩をぬきて、團扇に風を招きつゝありける。孟子は禮儀の厚き人なれば、かゝる風を見しより、如何にも氣にさわりしかば、そのまゝ後を向きて歸り給ひしが、それより後如何なる用事のあるとも再たひ妻の室へは行き給はざりければ、妻もうしとや思ひけん、その母に仔細を打ち明かして、親の元へ歸らんとし給ひける。然るにかの三遷の敎へを以て子供の敎育と爲し給ひて、千歲の後迄も知られ給へる孟母は、靜かにその子を呼びて、誡しめ給ふ樣、そなたは妻が禮を失したりとて、妻をうとんじ、妻を見ざるよしなれども、そは以ての外なり。妻の禮を失せしにはあらで、こは汝が禮を失せしなり。それ禮の大

法に三つの敵あり、第一門に入らんとする時は、先づ聲をかけて、誰か居給ふやと云ひ、然して後始めて入るべし。これ内に居る人の不意を打ち、不敬の擧動なからしめんが爲めなり。第二は堂に上る時に音なふて上る、こは人をいましめて怠なからしむる爲なり。第三は戸を開きて内に入るときは、向ふの人の様を見ずして、たゞ自が足の下を見つゝ進むべし、こは人のあやまちを見出さゞるためなり。かく大法にあるを汝之を犯かして、反て妻をとかむとは、汝こそ禮法にもとりたりと云ふべしと、様々云ひ聞かしめ給ひしかは、孟子道理に服し給ひて、それより妻に對して始めの如くなり給ひしとなん。

我が國にては、はだをぬきたりとて離縁すると迄にきびしき事もあらざれど、何にせよ人の室へ音なはずして入るは失禮なれば、成るべく之を心得ることそよけれ。

料理法

不意の來客に當りての用意

世の中は繁雑にして不規則なり。時計の回る様には何事も進まずされば、身體の上より云へば、不時の病ひあり。地球の上には思はぬ天變あり。一家の上より言へば、計らぬ時に來客あり。身體の病氣は養生によりて逃かれもし、藥によりて癒やしもすべく、天變は天に任かせておくより外はあらじ。たゞ來客に至りては、計らざる時に、計らざる用事を持ちて來るべければ、兼て用意して不興ならざる様に待ちかまゆべし。隨分夏の日中、晝寐の頃に客に妨けらるゝは、迷惑なるものなり。一家和樂して談話をなす間に、來客あるは、困りたる事なり。子供のある家の夕方、食事の仕度に世話しき頃、客の長談にあふは隨分厄介なる事あり。されど自分の身に引きくらべて思ひ見れば、人の

家を訪問する事は、易すき樣にして、中々面倒なり。今日は、明日はと思ふ中に、一月二月も立ちて、いよ〳〵人を見舞ふは一通にはあらず。人の思も推察して客にいやみの顏して、應對をなすべからず。殊に晝食、夕食の時分に客來ある時は、多くの物を不愉快なる顏して出ださんより、有り合ふものにても、麁末の品にてもよければ、手早やく料理して興を失なわざるこそ良ければ、兼て手輕き料理の法は心得をくべし。殊に珍客にあひて驚き狼狽せぬが肝要なり。

配膳の心得

○汁の身としてめづらしく、手間の入らざるは魚の切身を摺りて、葛を混じ、之をつまみて汁の身となすなり。汁に摺り身を用ひたれば、刺身の處にはむき蛤と、芹を用ひ、之にとうがらしを入れたる酢みそをつけ、○平には白がいもとて長芋を細く切り、水の中に入れ、引き上げて籠に入れ、上より沸騰したる白湯をかけたるものと、よせゆば、及び柚の汲口を用ひ汲物にはいせゑびの小口切に青のりを相手として用ひ茶碗にはすゝき、丸なす、新ごぼうを用ひ猪口には白味噌ととうふを摺り雜ぜしものゝ中にいかの切身と栗とを入れて、共に雜ぜ、用ひ、菓子碗には小花ゑび松蕈、春菊の三品をすましにて用ひ、山椒の實を辛味とす。以上は二汁五菜の料理なれども、茶碗及び刺身を省て用ゆる時は、二汁三菜となり、又た生盛、坪皿を加へて出せば、二汁七菜となる。此の頃の時候にては、生盛に、鯔の細作、葱の白味を酢味噌になし、坪皿には蓮根くづしどうふ及び、摺柚を用ゆべし。

其他に珍らしき料理の一二を擧げんに、

いなだの杉板燒

凡て魚に網にて燒くか、燒き鍋にて燒くを通常の燒方となせども、これ等は何れも表面計り焦けて黑くなり易すければ、熟達の功と、注意の多少によりて成り上

りその甘味、外見に大に關係あれども、此の杉板燒の方に隨がふ時は、焦げるの憂なくして、味は元より甘まし。さてこの法は杉板を二枚用意して、一枚の板の上に塩を蒔き、その上に燒かんと欲する魚の切身を、皮を上に向けて置き、又更らに杉板を上せて之を火上に置き、蒸す時は、火は板をとをして魚を燒き、魚より出でたる水は、通常の燒き様の如く、火中にをちずして、皆の味その内に殘るものとす。

鰹のでんぶ燒

此燒方は鰹にても鮪にてもよけれども、脂多き實は出來悪しければさくべし。葱の白味を薄く切りて、鍋一面に行き渡る様に並らべ、その上へ燒かんとする魚を、さしみの如くに切りて並べ、微火にかけて燒くべし。

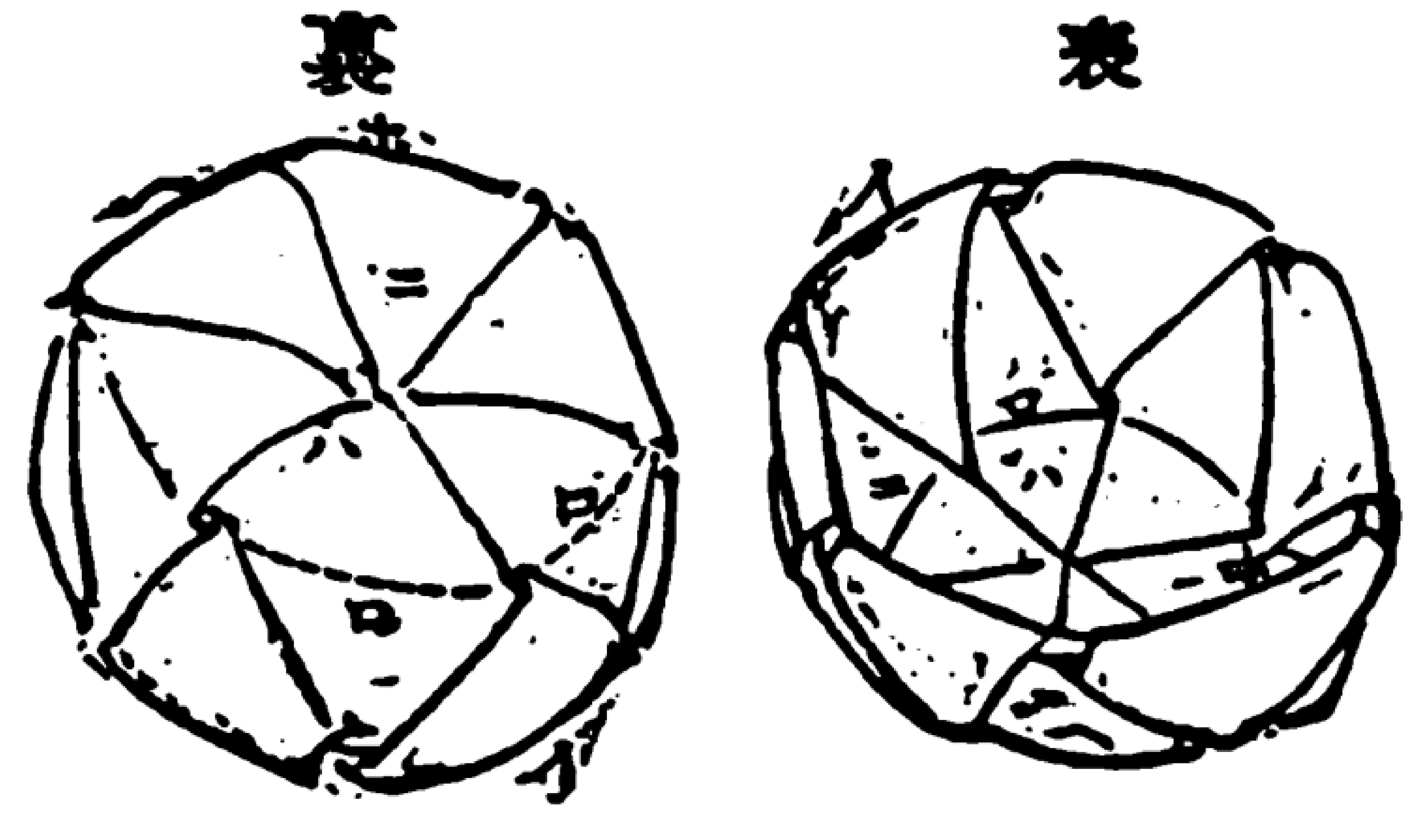


折り皿

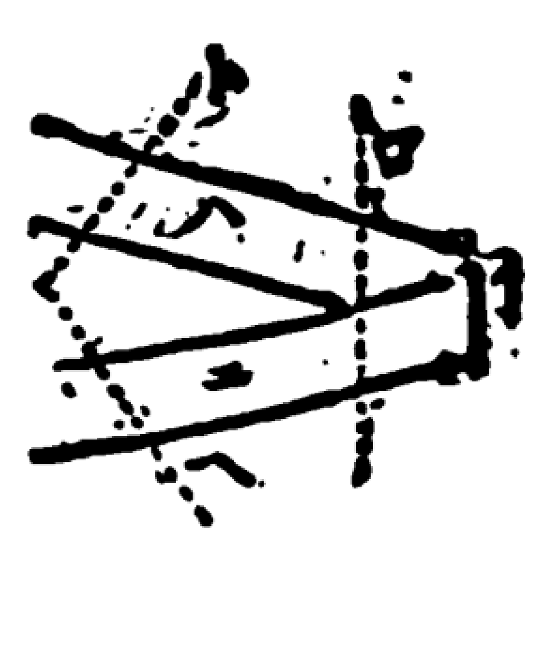
池田すみ子

ふるき新聞紙など折りて皿の如くし、流動物ならぬものは何にても容れらるゝやう手強く作る法あり。

表　裏

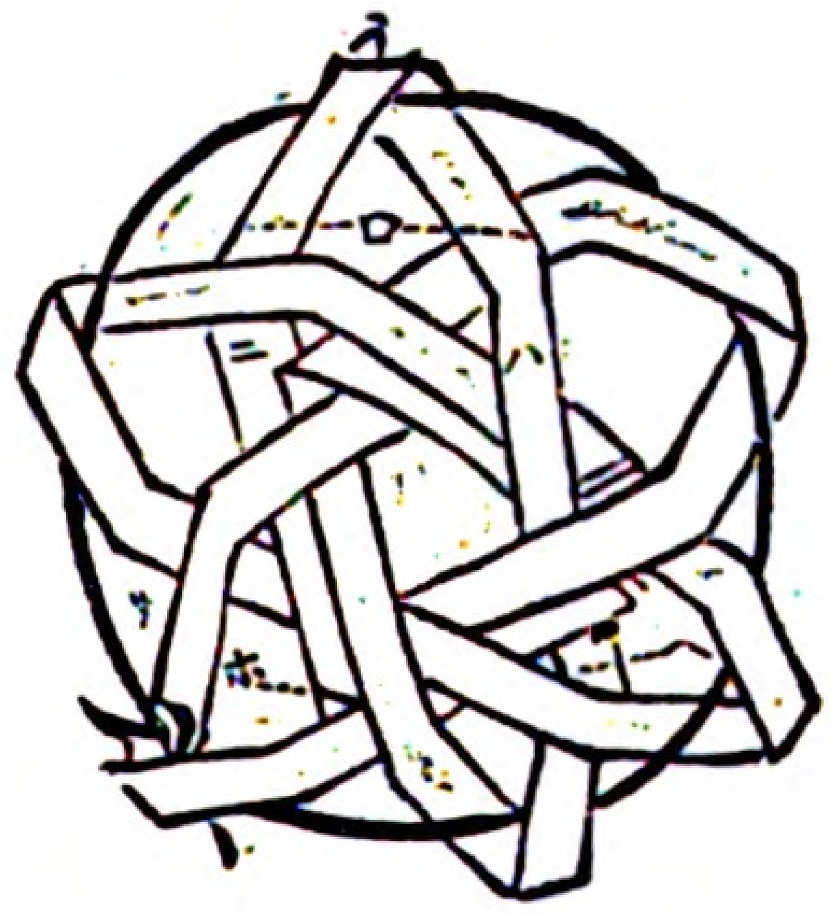


先づ新聞紙を帯の如く折り、長さは幅の三十倍餘となすべし。さて其の長さの五割五歩のところを下の如く折りて、イを線の一片となし、又ロ線の處を折りてハニを並ぶ、これを底となすなり。次



はホヘを折てまづ長き方にはイ同様線の一片を作り、短かき方は直に對方に倒し出し、其處にて線の一片を作るべし。順次斯の如くして線の五片出來たるとき、

別にこより（新聞紙などにて極めて狹き帶を作るもよし）を作りて緣に引き通し、其末を結び合せ、その結び目の上に第六片の緣を折り掛け、帶の端は內と外との折目の間に挿みて止むるなり。今折り掛けやうの見易きために帶を細長く寫し出せば下の如し。



世の暇ある姉妹の夏の長き日或るは秋の夜長の慰みには、面白きわざなりかし。又その紙の厚薄形の大小等はその好むがまゝにてよろしきなり。

婦人職業案內

「ボール」箱製造

「ボール」は麥藁等の屑物を以て製したる西洋厚紙にして其色茶褐色を爲し紙面粗雜にして厚きものなれば、紙箱の內心とするに適す、價も甚だ廉なるものなれば種々なる箱類を製し內地の需用のみならず外國へ輸出向も甚だ盛大なり、勿論始は外國より舶來品なりしも今は內地に於て廉價に生產し得らるゝを以て當時は外國より輸入絕無となれり、內地にて盛に生產する所は王子又は富士の製紙塲なり、

「ボール」箱製造所は、府下幾百を以て數ふれども一大會社として此業を營むものなし、其の最も多き塲所は神田、下谷、淺草、本所、芝區にして一製造所に二十人內外の職人を雇ひ置くものは其の重なるものにして大抵は五六人より十人內外の人を以て營業し行くもの多し、職人は重に婦人と小兒にして此業は別に機械を要せず、「ボール」を以て形造せられたる大小の箱の上を種々なる彩紙を糊つくる迄に止るものなれば婦人小兒に堪えられざる勞力を要するにあらず、十指と兩眼ある人には老若に係はらず誰にても製し得らるゝな

り、而して其製造品は內地向にては菓子折、鷄卵箱、海苔箱其第一位を占め其他小間物屋唐物屋等に用ゆる小箱の如きは凡て「ボール」の製作に係はるなり、然れども「ボール」箱は內地の需用よりも外國輸出に多數にして彼地にて種々なる品物に用ゐられ、此業は將來多望の職業なれば製造も追々盛大なるに至るべし。

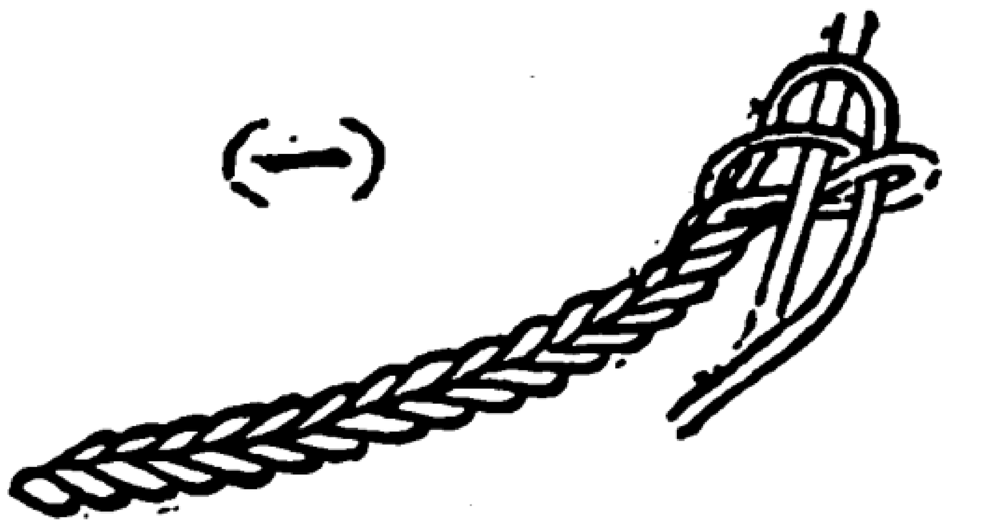
而して職人の賃銀は男女、壯幼、又は製造の難易又は作業の巧拙によりて差等ありと雖も婦人と小兒とは一日十時間(朝七時より夕五時迄)三錢より十錢迄とし、男子は十時間十錢より三十錢迄の日給とし、繁忙の節夜業ある時は時間の割にて增給す、諸君諸姉試に「ボール」箱製造場の前に立ちて一見せられよ、僅に六七歲の兒女の一連が紙片紛續の間に埋り楓の如き小さき手指もて糊をつけ紙を張りて孜々として勤勉するを認めらるべし、彼等幼なりと雖も自己の額上の汗を以て自己が日々の糊口を爲し行くなり。

手藝案內

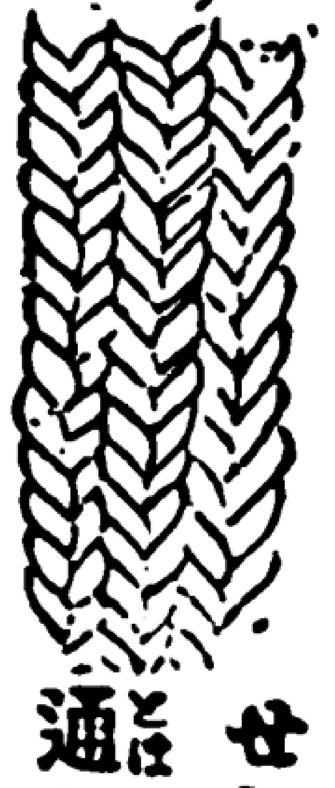
寄連鎖と鈎編

毛絲細工には寄連鎖と鈎編は最も要用なるものなれば其編法を記すべし。但し寄連鎖には、普通と二重寄連鎖の二法あり。今此二個の編方を記さば、先づ寄連鎖は普通の連鎖を寄せ合せたるものにして、總て袋物の底や其他、地の詰りたるものに用ゆ。其法は一番最初に入用に適ふ丈の長さの連鎖を一筋編み置き、フークを其連鎖の最端の輪に通し、次に其隣の輪に通して糸を搦ひ、其糸を一時に引通し、又其の引き戻せし所の輪にフークを通し、其隣の輪に通し斯の如く、幾度も編む時は寄連鎖を得、即ち

（一）



（二）

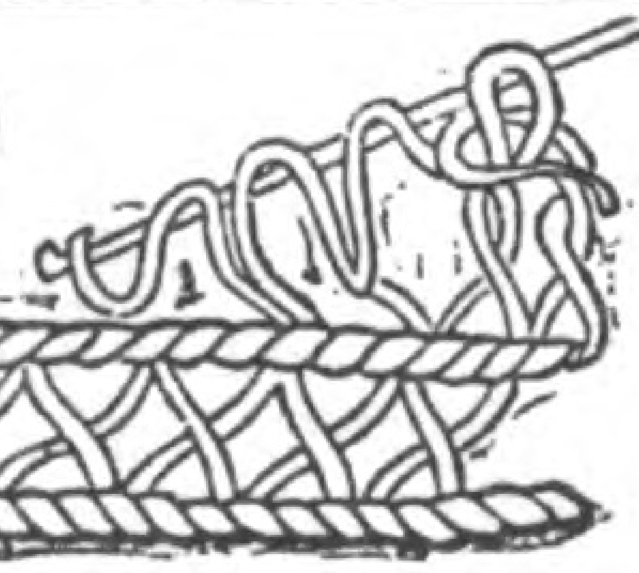


（一）圖は寄連鎖の編掛を示したるものにして（二）圖は其出來上りを示したるものなり。

又二重寄連鎖の編方は、矢張入用丈に連鎖を編み、其端に至りフークを連鎖の第一の輪に通し、又其隣に通し糸をすくひ、二の輪を一つに引き戻し、其の引き戻せし所に生したる輪へフークを通し、糸を掬ひ、フークにかゝり居る輪を一齊に通し、斯の如く幾度も同じ樣に編めば難なく二重の寄連鎖を得るなり。

鉤編の法は前に記したる連鎖を入用丈に編み終り、其編初め即ち第一端の輪一つをフークにかけ、其の儘鉤針を連鎖の心中の孔より後へ通し、糸を掬ひて之を引き出し、又糸を掬ひ、フークにある二つの輪を一時に通し置き、其フークに殘れる一つの輪より又編み始むべし、斯くして得たるものにて帽子其他袋物を製作し得らる。

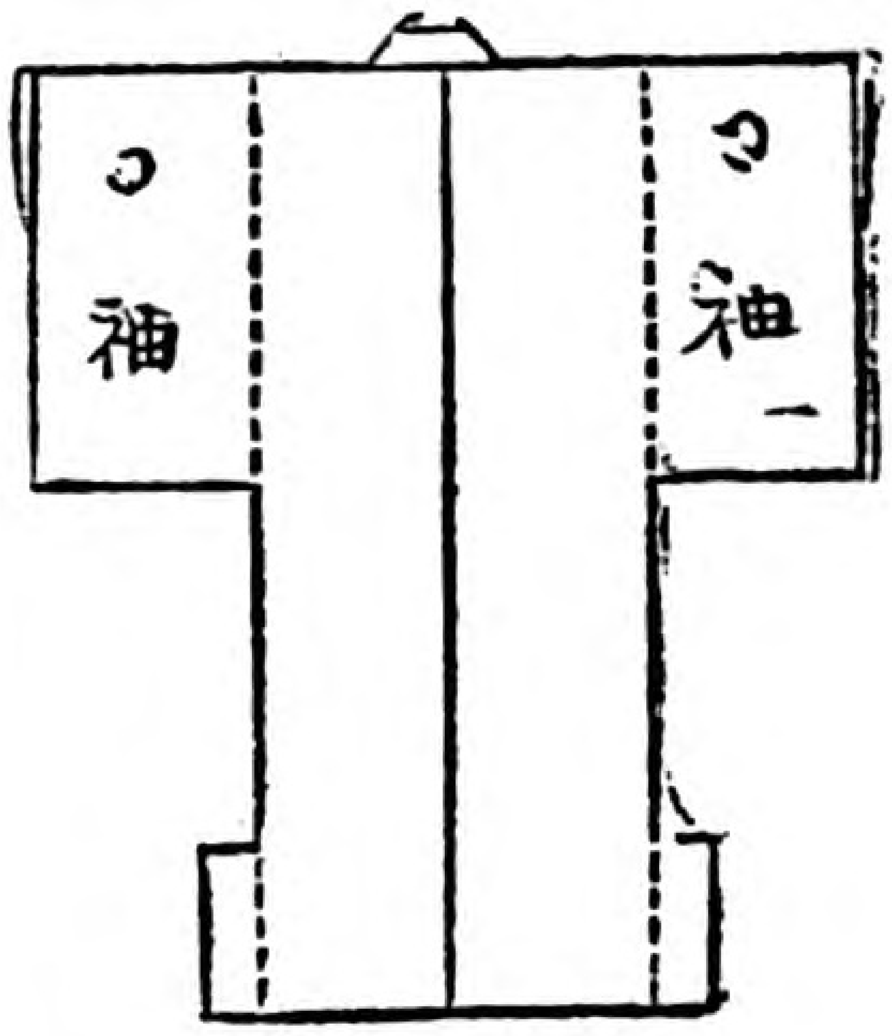
更に一個の編方を記せば、前法の如く入用の長さに連鎖を編み置き、其第一端即ち最初の輪にフークを通し、其フークに前より後へかけて糸を一巻き捲き、其次に連鎖の眞中を後より前へ通し、糸を掬ひ、其の掬ひ取りたる輪へフークを通す時は、フークに三つの輪を持つ、故に其のフークを以て糸を掬ひ取り、輪二つを引き通すべし。然る時は其の通せし所に輪を生ずれば、それへフークを通し、糸を掬ひて三つの輪を一齊に通し、斯の如く幾度も編む時は容易に出來得るなり、其編方進行の樣は（三）圖の如し。


（三）

綿入の仕立

綿入の仕立は、裁縫につきては單物又は袷と差したる變りなし、唯だ「フキ」（裾に裏地のかへりたる處）の厚さと袖口に「フキ」を取る丈なり。而して綿入をする方法は木綿なり絹物なり表と裏を縫ひ終らば圖の如く

し、うらがへしに疊み付け又表を延ばし、表へは眞綿（木綿物には眞綿を用ゐずとも宜し）を引き、綿を入れて、裾綿をつくり、又綿を引き裏を被せ



て能くのばし、右の如く前に綿を入れて縫ひ合はすれば、容易に綿入を製し得らるゝなり。

宗十郎頭巾



巾二尺長四尺九寸を以て製し得らる、即ち（い）は頭合一尺三寸。（ろ）は 垂合各一尺八寸。



社交一斑

西洋禮式一斑（承前）

ＹＨ生

吸煙

吸煙は害多くして益尠きものなれども、世の多くの人は吸煙を好み、一度此習慣に浸染するに至れば、又之より脱離すること能はざるに至る、吸煙は身體の上にも害あり經濟の上にも損あれど、如何せん世の紳士と呼ばるゝ多數の人は、邦人と洋人とを問はず之を常用するものなれど、吸煙にも多少の制裁なかるべからず。

吸煙の注意――貴女の面前は勿論一女子の面前に於ても吸煙を許さず但し其許可を得れば此限にあらず。一家内に在ても夫は其妻の面前にて吸煙を憚るは禮の一端なり、然れども家内にては他家にてよりは寛恕すべき處あり、男子は婦人の居る家を訪ふ時は其入口にて卷煙草の火を消す可し。夜會又は公會又は其他公衆の會合する處にては吸煙室又は庭園又は客房に行きて試むるのみ、たとへ客房と雖も女客ある時は遠慮するを禮とす。滊車中の如き男女混入且つ限られたる狹き處にて吸煙すれば、煙、車内に漲り、煙草を好まざる乘客の迷惑を釀すこと尠からざれば、吸煙者は必らず其心すべし、若し暫時にても吸煙を廢す

ることを能はずんば立ちて滊車の窓外に煙を吹き去るべし。凡て公衆の處にては吸烟を憚るを禮法とす。爰に一話あり。或る老婦人と其懇親なる老人某と公園地に散策を試みし時、老婦人は老人が吸烟家なるを知る故に、遠慮なく煙草を喫せられよと勸めしに、老人固く辭退す。老婦人曰く君は妾が家に在ては食後能く吸煙せらるゝに、此處にて固辭さるゝは如何なる故にやと問しに、老人頭を掉り、否とよ、貴家に在ては懇親にあまへて吸煙するは自家に在るの思ひを爲せばなり、されど此處にて遠慮なく吸煙せば他人の迷惑とならん、且つ知己の者集り來り余の吸煙するを見ば妨げなしと信じて吸ひ試るもの多からん、さる時は吸煙所の如くなりて多くの貴女等を苦しむが氣の毒なりと答へしとなん。此一話にても吸煙の塲合あるを知り得べし。日本人は男女ともに吸烟する風俗あれども、西洋にては婦人の吸煙するは稀に見る處なり。嘗て日本人某が長らく外國に止り始めて歸朝し、横濱より東京に來る滊車中にて、好物の烟草を喫せんと欲すれども同車内に婦人客あるを憚りて甚だ逡巡したりしが、遂に止みがたく其婦人に吸煙の許可を請ひしに、婦人はほゝと打笑ひ其身も懷中より烟草入を取出して吸煙の相手を爲したりといふ。男子にても吸煙するは餘り良き風俗にあらざるに、婦人の身として烟管を持つは貴女に有まじき事ならずや。

室內裝飾

室內裝飾にも自然の禮法あり、然れども甚だ煩雜に渉れば玆には其概畧を記すに過ぎず、又裝飾の流派の多端なること、我國の座敷の裝飾と異ならず、各々嗜好と流儀とあるべければ、西洋諸國中に殊に社交の中心たる佛蘭西巴里の普通の裝飾法を記さん。

怜悧なる人は室內裝飾を見て一家の主婦に一見せざる以前に、其質の賢良なるや、又は行儀の整頓せるや、又は賢良なるも禮法に志さゞるや、又は禮法を知るも賢良ならざるや、別言せば主婦の性質を察知するに足るべし、室內裝飾は實に一家の主婦を代表したるものなり。」

裝飾の要――凡て淸潔と溫雅と秩序あるを要す。

客房――火爐の右の方には主人の爲め肱掛椅子、賓客の爲には肱掛椅子又は長椅子を備ふべし、三四人以上の客を入たる室內には圓テーブルを備ふるを可とす、圓テーブルには席の上下なし、其傍には筆墨箱、書冊、寫眞帖、新聞紙、名刺筒を置くべし、客房に硝子戸棚等は宜しからず、客間に必らず暖爐を備へ置かざるべからずと雖も一日新炭を燃き置くは入費も尠からず、若し火を消し置けば來客の暖を取るに間に合はず、かゝる時には交際上手の人は居間に客を延き若しくは日を定めて來客を接待するを常とす。

化粧室――化粧室には拂子(頭、衣、爪、齒を掃除する四種)海綿、疎櫛、密櫛、鋏刀、鑷子、白粉箱、香水瓶等の雜品を臺上に正列し置くべし壁間に姿見鏡をかくべし。然れども化粧具は隨分贅澤を極むるものなれば富豪家に非ずんば別段に化粧室を設くる事能はず、寢室の一部に些少の化粧道具あれば足れりと爲す。

寢室及書齋——普通の家にては寢室と書齋は一室に置く、家族故舊の畫像又は寫眞は此室に置くを常とす。

食堂——には直形の卓子と椅子を備ふべし、家族故舊の畫像等は決して食堂に掲げ置くべからず、山水風月の油畫を掲げ又は一面の小鏡を置くは妨なし、大鏡を置かざるを例とす。

處女の室——裸體或は怪異の圖を掲ぐるは甚だ不可なり、凡て靜穆の趣を存すべし。

寫眞

室内裝飾の事を記したれば筆の序に寫眞の事を記さん。

寫眞帖——西洋にては各家必らず寫眞帖を備ね置くを常とす、寫眞帖は實に人生の紀念なり、秋の夜の徒然なるまゝに寫眞帖を開かば如何なる感か起る或は知己親友の顏を見或は故人の容貌を想ひて往事を追想し、此人は若くして死亡し惜しき事なりし、此婦は既に嫁したり、此女は他國に出發したれば再會するを得ず、此人とは能く談笑したりき、此娘は昔は甚だ美人なりしが今は著しく老ひて變れり、など追懷せば、今昔の感に堪えざるべし。

寫眞交換の注意——西洋人は已の寫眞と他の寫眞とを交換する習慣あり、然れども之にも法法なくんばあらず、男子が女子より自己の寫眞を望まれたる時は再應の請を俟たず之に應ずべし、女子は再參若年男子に向ひて寫眞を懇望するは禮法にあらず。男子は婦人に對して寫眞を懇望すべからず。女子は其新郎の外若年男子に寫眞を與ふべからず。婦人は男子より所望を受くるとも親族或は年長（老人）或は殊に身分の優れる人を除くの外は一切謝絶すべし。男子と男子、女子と女子の間に在て其一方より寫眞を贈られて已れの寫眞を贈らざるは恰も借金して返戻せざるに等しといふ。男子は服裝姿勢の正格なる寫眞にあらずんば婦人に贈るべからず。親族又は親友の中形寫眞のみは暖爐の邊に懸くるを常とす。贈遺用の寫眞は寫眞帖に入るべき手札形なり、其以上は最近の親族親友の朋友或は特別に懇望せらるゝに非れば人に贈るは禮法にあらずといふ。

流行の栞

婦人用舶來物

春夢

銀貨大暴落の原因より爲替相場に大變動を來せしゆゑ、舶來物は昨年より二割乃至三割の騰貴を見たり、

肩掛は、駱駝、「チル」地共に茶又は鼠の共模樣流行、巾は五尺より五尺五六寸の處、（駱駝は十圓より二十圓「チル」は六圓より十圓）毛絲の肩掛は機械製にて中に絹絲もて共模樣に織出したるもの、色は茶や鼠（上等六圓並一圓）、絹製は中々面白き織方にて今年始めて舶來せしもの

なり、踵を取るには如何と思はるれど美觀の點よりすれば隨一なり（代價上等六圓並四圓五十錢内外）

手袋は、相變らず羊皮、絹製、「カスメヤ」毛製、流行色は黒、淡茶、禮式用は二十「インチ」乃至二十五「インチ」の羊皮、

襯衣は、木綿製は六七十錢より毛製、白は一圓五六十錢より三圓迄、

履襪は平常用は「カスメヤ」毛製の黒色（代價七八十錢より一圓内外）

手巾は、麻最も流行、色は白、無地「ヘム」は一ダース三圓より六七圓、

女帽子の形は、昨年と差して變らず、山低く圍周大なるを好む、流行色は鼠、黒、茶（代價二圓四五十錢より六七圓）、

プラシは、近年内地に於て色々なる物に使用せられ日本服の半襟にも適用せらる、帽子や手提や袋物には無論の事なり（一ヤール一圓四五十錢）、是等の品物と價格とは婦人用舶來品商店新橋側關口より聞き得たるものなり、

流行の靴





流行の靴は普通はゴム靴並編上げ一般に行はる（價三圓五十錢より五圓五十錢）鰐革も可なりに行はゝるれど、大抵は佛蘭西黒革なり、而して流行形は昨年と差して異動なきも爪頭は平たく所謂「プツキリ」なるを好み、尖りたるものは全く廢れたり、又爪頭は雲形富士形等を好むものあれども、價に一の字を引きたるもの、若しくは無地なるもの賣口宜しく、ゴム入半靴も編上げ半靴も右と同樣なり（二圓より三圓五十錢）、禮式用ゴム引は格別の新流行もなく、婦人靴は櫻組にて種々なる製作を出すゆゑに、西洋婦人向に多く賣捌く由なり、

ゴム製鼈甲

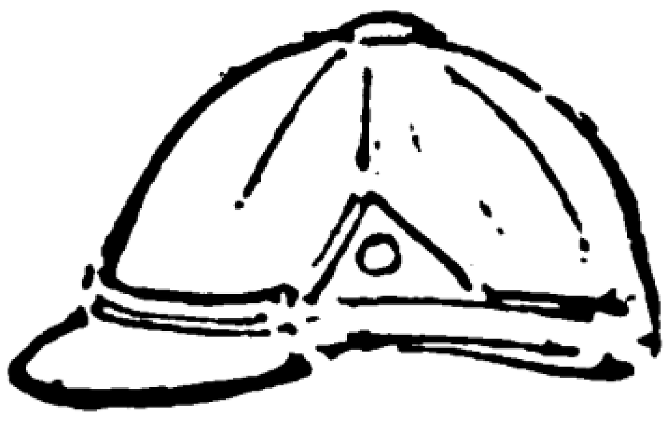
近來ゴム製の進歩驚くに堪へたり、ゴムを以て僞珊瑚の根掛や花簪を製したるものは汎く世に行はれしが、近來はゴムを以て種々の鼈甲細工を爲すに至りぬ、圖に示せるお初形櫛は其脊に牡丹を彫刻したるものにして一見酷だ眞物に近く、馬爪や卵甲製の如き下品なるものにあらず、製作甚だ巧なり（價五十錢）、





其次なる圖は同じく「ゴム」を以て製したる僞象牙の天神挿なり以て銀杏髷にも適用し得らるべし（價二十錢）、ゴムの原料は古綿なるが、

固形物となりて種々なる彫刻を施したる精巧品となる、人間の智術も驚くべきかな、



流行の略帽

本年は種々なる略帽流行する中に最も新奇にして最も行はるゝものは、左圖の如き鳥打なり、淡色の軟、羅紗にて製し、山の一側に角嚢ありて切符や其他の些物を容るゝに便にす、其他「ブラシ」若しくは「チル」を以て製したる大黒頭巾に水夫帽を混したるが如き新形あり、風情亦愛すべきもの、



縮珍織の羽織紐

近來新流行は縮珍織の羽織紐なり、丸織にして婦人羽織の「チヨッキ」結びにす、男子の間にも弗々流行し始めたれど、多くは女流の間なり、色と模樣は人々の嗜好に任するも價は他の絹紐よりも廉なるものあり、價格は二十五六錢より購ひ得らる、

●日用品物價

⦿白米（一圓に付き）●一等白米八升五合●二等白米八升七合●三等白米九升〇〇●四等白米九升五合●五等白米九升九合

⦿雜穀（一圓に付き）大相場●本實大麥三斗一升●臨場大麥三斗三升●裸麥二斗二升五合●相州小麥一斗八升●船橋小麥一斗八升五合●常州小麥一斗九升三合●下總小麥一斗九升●上州小麥一斗九升●千葉小麥一斗九升五合●札入竹林麥一斗七升並一斗八升八合●上割麥一斗八升並二斗〇五合

⦿鹽（一圓に付き）●赤穗三俵九分●大鹽三俵九分五厘●八家三俵●九分五厘●本齋六俵一分五厘●新齋六俵二分五厘●古積上二俵八分五厘●同中三俵

⦿炭（一圓に付き）●紀州物、●紀州丸備二俵●同中二俵二分●同並二俵三分●同角備最上二俵三分●同中二俵五分●同並二俵七分●同淺備上三俵三分●丸淺備三俵六分●野州出土釜（百俵に付）●同丸並上二十七圓●樒椚二十六圓五十錢●丸次通上廿三圓●同並二十一圓半●同割物二十圓●同雜丸通飛二十一圓●同並十九圓半●同次利物十八圓半●伊豆大城出（一圓に付）●最上丸五五印五俵●同並五俵二分●同次五俵三分●同東浦物七俵●同小狹飛四俵●同椚上飛四俵五分●同次五俵

⦿薪（一圓に付き）●上總木更津出堅五分一三十五束●雜五分一五十束●同堅木三十束●堅三五〆二十六束●黒木束四十二束●同松三五〆五十束●同無才六十束●松五六匱五十五束●同大堀出堅木五分一三十束●同雜五分一四十三束●同堅五六〆二十五束●同姉ヶ崎出松大八七十束●同無才八十五束●同姉ヶ崎堅六八四十束●下總久角出●西川三尺三寸廻り十一束●同西川三尺廻り十三束●同二尺八寸廻り十六束●雜四川三尺三寸廻り十六束●同西川三尺廻り十八束●同西川二尺八寸廻り廿二束●松尺才二十本●同九寸才三十本●同八寸才四十本●同七寸五十本●同六寸才七十本●同五寸五分才八十本●同五寸才九十五本●同四寸五分百十本●同四寸才百二十五本●同三寸五分才二百本●同四寸才二百五十本

雜録

遺珠類々

○勵く可し、喰く可からず、人は惟勵くに由て世に住むを得るなり、　ヴオルテール

○故意の無學は罪なり、　ジヨンソン

○假令善き目的の爲めに爲すとも、惡は即ち常に惡なり、吾は一國民を救はんが爲めに、一小兒を殺すを欲せず、　ユーゴー

飼猿

筑峯女史

ある深山路に夫婦の山賤住みける。年久しう經ぬれど子と云ふ者なければ、山稼の歸るさひろひたとりる女猿をこよなう愛しみ居たる内、此猿子を設けし故夫婦ともに孫のよう痛はり育て、犬などの害を受けぬやうにとて、夫は籠を作りて妻にあてがひ、此の籠に入れて日當りのよき暖なる所へ釣り置きて山稼に出るを妻の務となしぬ。日數ふるまゝに子猿は餘ほど成長しければ、ある日のこと妻はふつと籠に入るゝ事を忘れて出で行きぬ。

夕つ方歸りて見るにこゝわいかに小猿の見えざれば、夫婦もろともに大に驚き、そこはかとなく尋しかど見當らず、惑ひ居る中に、親猿の鳴聲を知べに行て見しに、暴獸にや害せられけん裏の山路に骨などのありければ、夫婦の悲しみは更なり畜生なれども親ざるは物狂はしきまで鳴き悲しみいとあさましき有樣に、妻は大に困じ、かつは籠に入るゝ事を忘れざりせば今の歎きはあるまじと心の内に深く悔みぬ。夫は少氣みじかきものなりければ、己のが申付を怠りしため日頃愛せし猿をも失ひぬとていたく妻を怨み、それよりは夫婦の間これまでの如く睦しからずなり行ぬ。或日の事小猿の事につき又も夫婦の間にあらそひ起り、終に妻は住なれし夫の家より追ひ出さるゝ事となり、人めを忍ぶに便りよしとて、日の西にかたふくころ我が里へ行く事となりぬ。彼の親猿は大に驚き、妻の袖にとりすがり、又は夫にわぶる樣の事なんとしけるも、其甲斐なかりしかば、妻が出行影を見て悲しげなる聲をしてなき叫び居たるがやがて見えずなりぬ。夫れよりその猿

は妻の里わたりの山路に行きてをり〳〵妻にあふ事を樂しみとし、夫の方に來らざりければ、彼の夫は妻を去りし爲に猿にまでわかれ、もの淋しさに堪へかね、その身の短氣なるをわびて、妻を元の如く我家へ呼び戻せしかば、猿も又歸り來りぬとかや。げに夫婦の間に子なければ離別など云ふ事のあり勝と聞きしが、今此の夫婦の山賤も猿だになくば長き別を爲しつらんものを、恩義を知れる猿の爲めに夫婦の元の如くなれるは、喜ばしき事にこそ。これにつけても世の中にさるつみもなくて妻をばさる人は、さるにもいかて劣らさるらん。

談叢

大なる母

「大なる父が大なる子を生まぬことはあり、大なる母が大なる子を育せぬことは稀なり」とは、古來の偉人傳が常に吾人に語る所なり。吾人亦其多く然るを見る。今の自由黨總理板垣退助氏母氏の如きも同じく其例に漏れぬものと謂ふべし。

板垣退助氏の果して如何に大なる人物なるかは吾人の知る所にはあらず、然れども維新の元勳たり今日の自由黨總理たるに恰當すべく彼を生育したりし彼が母氏は、吾人明に其天下の摸範たるべき賢婦人なるを知るなり。宜、斯母ありて而して斯子あることとや。

聞く所に據れば、彼が父榮六正成といへるは遠慮なく言へば狂者なりしなり。一の土佐藩臣として資性温厚なるものなりしも、年十八狂疾を發、時に病勢に退進ありき。

彼は嘗て一婦人と婚したりしが、疾を獲るに及んで之を去り、別に婚を藩の中老林氏の女に求めたりき。然かるに林家は門地高くして之を許さゞりしが、女獨り言ふ「女は己を知るもの丶爲に容づくると聞く、苟も

を入れて見やうとの考へが、充ちて居るものですから、一朝細長なる器物を持ちますと、始終舐めるやら嚙るやらして口に許り保つて居ります、夫れ故、若し誤て之を咽喉等に指塞まするし、呼吸が絕へて窒息を來します、然らば僅か一器の爲めに歸らぬ旅に趣きいくら嘆いてももはや仕方はおりません、玩弄物に御注意なさいとは此の爲めです、獨逸のある人は小供の育て方に付きて規則を立てましたが、一體此の人はたいそう、小兒を愛しまして、殊に生れだての赤兒を最も愛しました、終ひに一生其の事ばかりに力を盡し幼稚園と云ふものを拵へました、幼稚園と云ふものは、小兒の花園と云ふ意味で御座いまして、花園の花を能く咲かしますには、[illegible]駄師が枯れた枝や惡ひ葉は剪みとり、肥料を與へたり、又た荒い雨風や雪霜の爲めに傷められないやうにいろ〳〵手當をして、丹精しなければなりません、其の花にたとへる小兒を善く教へ育てるにも矢張此れと同じやうな理てごさいます、此の幼稚園では、球や枸や圓柱躰や立方躰や立形の置きかたなと、其の外種々の物を遊び道具として與へます、此の遊び道具は、一ッ〳〵に細かく分ち毀して、其の內部を窺ひ見ることが出來ますから、自然と小兒の物事を穿鑿する心を勵まします、又一ッ〳〵に分れたる部分を樂むれば、樣々の物の形や、品物を造り拵へることが出來ますから、自然と新らしく物を造りこしらへる心を引き起します、小兒が物をこわしたり、潰したりするのも、大人から見れば譯もなく道理もなくたゞ打ち毀すやうに思はれますが決して左樣ではござりません、一体小兒の、ものを毀したりするのは、其の物の內部を窺ひ探らんとする自然精神の働きが進む驗てござります、そこで此の人は、何んでも小兒のおもちやは毀すことも出來、又組たて又は併べて新しき形を造り出すことも自由に出來るものが、要用であると云ふことを見出し、かように、色々の道具を考へてこしらへましたのです、私も幼ない時には、隨分玩弄物を毀しまして、父母にも姉にも、叱られましたが、其の好んで愛玩せしものは時計が一番でした、併し時計の如きは構造が復雜で毀れ易く高價の物ですから、絕へて父母の之を與へませんのも道理です、けれども私の之を好む精神は抑へがたく遂に之が摸造に着手し、孜々としてゴム帶を以ては發條にかへ、一厘錢を以ては車にかへ針金を以ては時計を造るなど止まざりしが、父母の此が擧動を見て此の兒は細密なることに意を止めるから、彫刻術を學ばせやうか時計師としやうかなど頻りに心を痛めましたがふと考へて、醫學は人間の微妙な機關を研究するものぢやとて醫學に從事せしめました、此の如く小兒は遊びかたによりて其の心の底が知らるゝものです、凡て小兒は、三ッの仕方に於て其の性質を著はすもので、三ッの仕方とは顏つきと言葉とそして行ひで御座りますが、此の三ッは小兒の遊びの內に常に、現はれますから父母や教師はたとへ其の小兒の遊びかたが、いくら不器用に見ゑても決して其の仕方の上邊ばかりに眼を付けず、必ず其の行ひに就て見なければなりません、小供といふものは大人から見れば甚だ不十分の遊び道具を以て世の中の滿足した者のゝ眞似を致すもので御座ります、例へば菓子や菓物を貰ひましては、料理の眞似をし、喇叭を以ては兵隊の眞似をし、棒を以ては擊劍の眞似をし、姉妹兄弟と遊ぶときは夫婦の眞似をして、夫婦喧嘩の眞似や、父親が母親を叱る眞似などを致しまして、其の父母の行ひの惡しきことも善きこともみんな著はします、是が即ち其の父母は、平生氣が着かないで居ても、いつか其の兒の心の働きに、與へたる結果と申するので御座ります、斯く小兒の精神は潔白なるものでございますから、どのようにも感化せしむることが出來るものです、歷史に名高き彼のナポレオンの幼時、フランクリンの紙鳶、孟母の三遷等はよい手本です、

明治廿五年九月十四日遞信省認可

國民新聞

十一月以後の國民新聞か平生蓄積したる力を發揮するは此の時にあり。議會は眼前に迫り、政界は活動す。

國民新聞は、其名の示す如く、**日本全國民**を**相手**とす。決して區々たる一黨一派の機關にあらす。

國民新聞は徹上徹下**政治的革新**の**目的**を**貫透**せんと欲す。政府に對しては、三條の約束の必行を責め、民間諸黨に對しては、進歩的大合同の精神を貫かしめんと欲す。

國民新聞は對等條約改正の急先鋒なり、彼は開國進取の國是に則り、條約改正を以て、現內閣か須らく斷行す可き責任と信す。彼は**內地雜居尚早論**に**反對**す。

社會公德の**問題**は、國民新聞肝血の注く所、其の腐敗政治家、墮落政商を掊擊するに於ては、決して餘力を剩さゝる也。實業上、生產上、其の農工商一切の觀察に到りては、公平敏快なるを期す。而して記事の往々出色にして奇警なる**專門的實業新聞**を**驚**かすものあり。

每日曜の**文學附錄**は固より、時々世界に於ける新潮流、新現象を紹介し、若しくは當今の時務に適應する大論文大記事の附錄を添ふ。

演說、批評、對話、挿畫、外報、その他重要なる記事摘要、皆な國民新聞特色の存する處。要するに國民新聞は、**儼然**たる**獨立新聞**たる、**良心**と、**智慧**と、**品格**とを**有**せんとを期す。其の壓制者に背を向け、被壓制者に顏を向くるか如きは、自然の結果のみ。

若しそれ**第五議會**に對する問題を說明し、論議し、及ひ政治世界の風雲を指顧し、其の活動を豫測し、曲描するに到りては、聊か**他**の**新聞**に**比**して**一日**の**長**ある**可**しと**信**す。

定價　一枚一錢五厘一箇月前金三十錢三箇月前金八十五錢
地方郵稅一枚五厘一箇月十三錢

廣告料　一行の代價左の如し(但五號活字二十二字詰)
一回　十三錢　二回以上　十二錢　五回以上　十錢

東京市京橋區日吉町四番地　**國民新聞社**

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地秀英舍印行